

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）

1 調査の概要

遺跡保存地区は吉田構内の南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置する。約2000㎡の指定地内には弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡21棟が現地保存されており、発掘調査はすでに昭和57年度（第1次調査¹⁾）および59年度（第2次調査²⁾）の二ヶ年にわたって実施している。調査にいたる経過および各年度の調査成果はすでに先の年報で詳述しており、参照されたい。以下では昭和60・61年度の各年度の調査の概要を記することにする。

昭和60年度（第3次調査）は第2次調査区の南東に隣接する地域約470㎡について、昭和60年7月19日から10月9日にかけて実施した。検出した遺構には、弥生時代中期および終末（庄内併行期）の竪穴住居跡4棟、弥生時代中・後期の土壙5基、古墳時代の溝1条、古墳～奈良時代の河川跡1条のほか、弥生～古墳時代のものと思われる多数の柱穴がある。河川跡は第1・2次調査ですでに確認しているもので、南東への延長部分を検出した。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、敲石、石核、韃の羽口などがある。

昭和61年度（第4次調査）は第3次調査区の南東に隣接する地域約490㎡について、昭和61年7月11日から9月17日にかけて実施した。検出した遺構には、弥生時代中期後半の竪穴住居跡1棟、弥生時代中～後期を主体とする土壙13基、弥生～古墳時代の溝5条、古墳～奈良時代の河川跡1条のほか、弥生～古墳時代のものと思われる多数の柱穴がある。弥生時代中期後半の竪穴住居跡は、周囲を弧状に巡る溝を付設しており、溝との空間地に2基の土壙を伴うものと考えられる。河川跡は第3次調査までにすでに確認しているもので、南東への延長部分を検出した。出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師

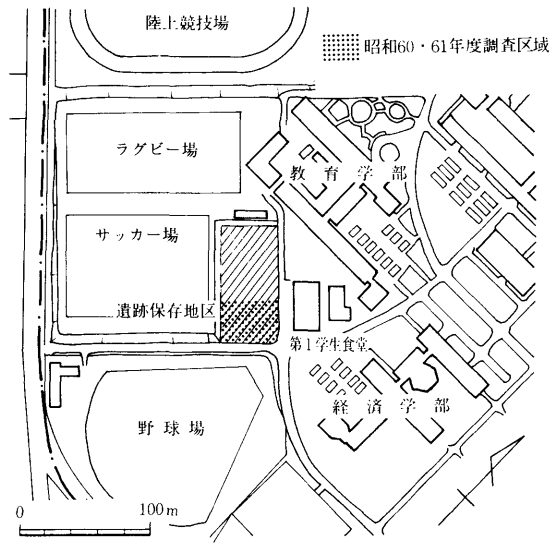


Fig. 21 調査区位置図

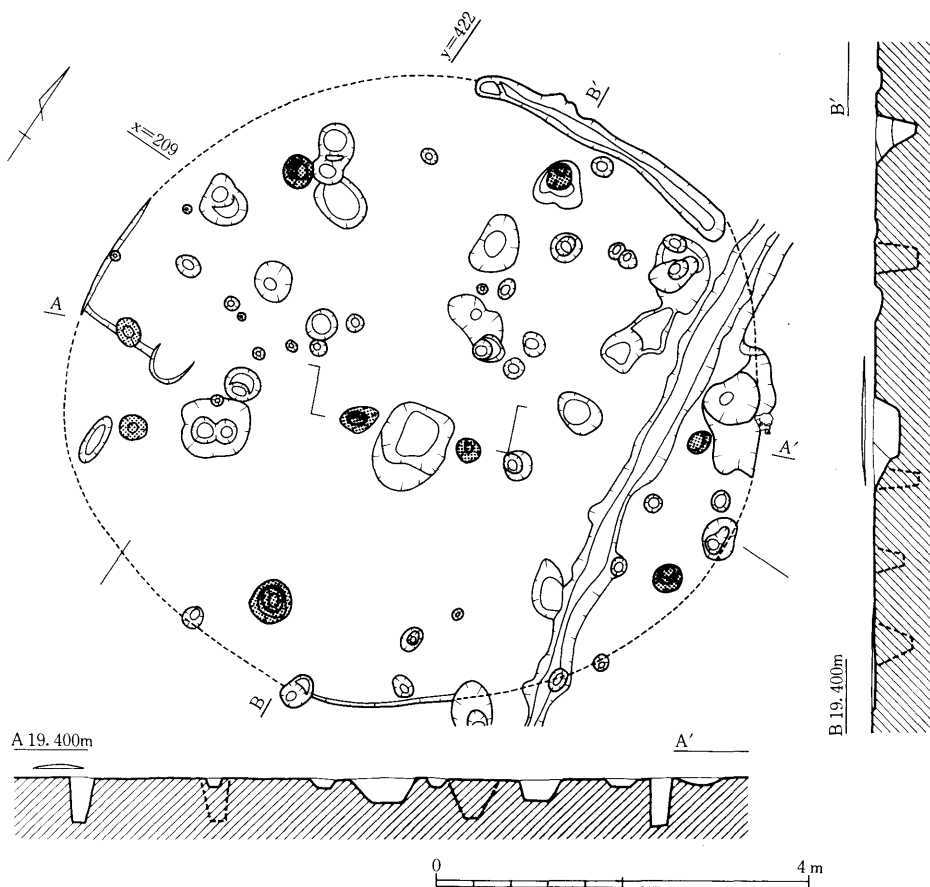


Fig. 22 第14号竪穴住居跡実測図

器、須恵器、石鏃・削器などがある。

なお、第3次調査では昭和60年9月13日、第4次調査では昭和61年9月12日に現地説明会を開催し、各調査の成果を公表した。また、調査後はいずれも遺構面を厚さ約10～15cmの真砂土であらかじめ被覆した後、埋め戻しを行なった。

2 遺構・遺物

(1) 竪穴住居跡

第14号竪穴住居跡 (Fig. 22, PL. 8(1))

調査区の西端部に位置する大形の住居跡で、吉田遺跡調査団によって部分的に、また、昭和59年度にすでに北半部を検出している。平面形態は円形と思われるが削平が著しく、周壁は南北両端部を除いてほとんど消失している。径約7.4m、床面積約40㎡前後の規模を

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）

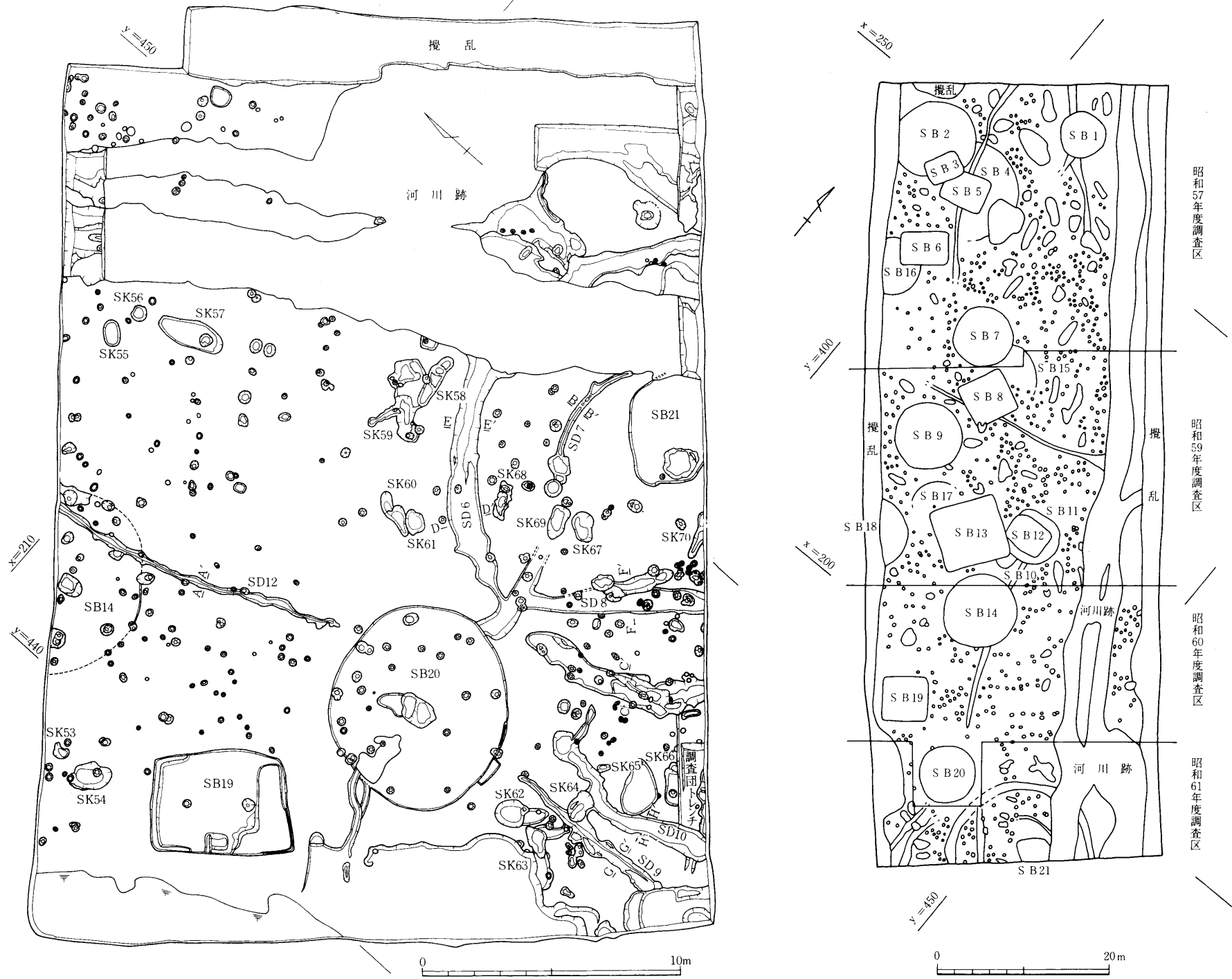


Fig. 23 遺構配置図

竪穴住居跡

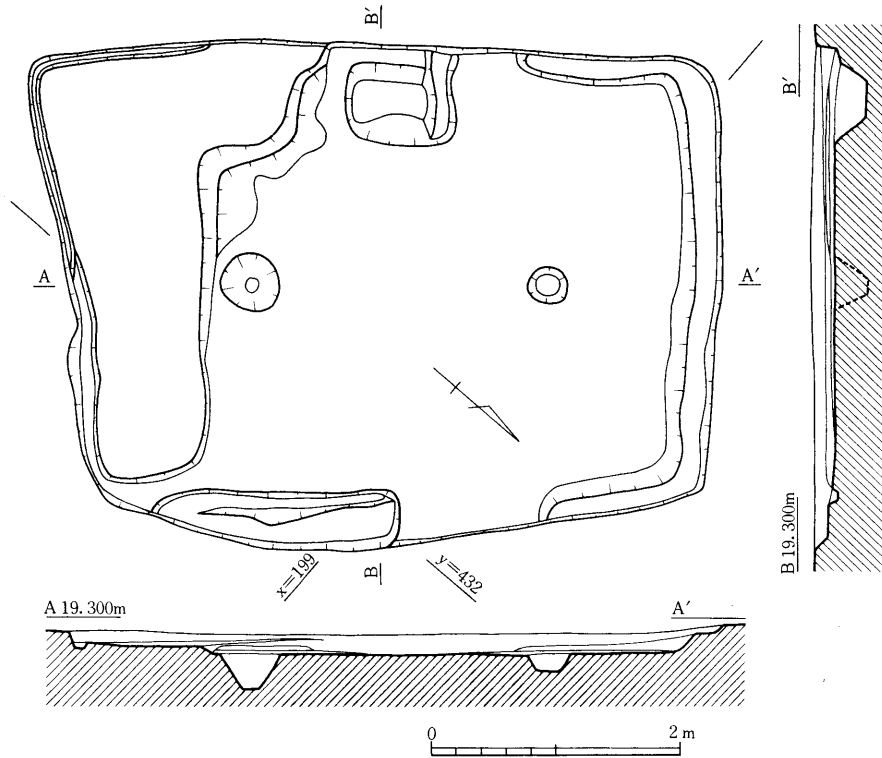


Fig. 24 第19号竪穴住居跡実測図

もつものと推定され、北辺部には検出面からの深さ約6～7cmの壁溝が巡る。主柱は1本未検出であるが、8本前後が配置されたものと思われる、床面中央には支柱穴が認められる。

遺物は全く出土しておらず、また、第12号溝との切り合い関係も判然としないため時期は明らかでないが、樫野川、佐波川各流域での竪穴住居の平面形態、規模、主柱数等から推して、弥生時代中期に属するものと考えられる。³⁾

第19号竪穴住居跡 (Fig. 24, PL. 8(2))

調査区の西端部、第14号竪穴住居跡の南に位置する平面形態長方形の住居跡である。東辺484cm、西辺548cm、北辺344cm、南辺358cm、床面積19.3㎡の規模をもつ。検出面からの深さは20cmで、西辺の中央および東辺の中央からやや北寄りの部分を除いてベッド状遺構が巡る。ベッド状遺構は床面から10～15cm高く、面積は5.5㎡で床面積の約28%を占める。

東辺の南半部および南のコーナー部分には壁溝が巡る。前者はベッド状遺構の下位に幅20cm、深さ3cm、後者は周壁に沿ってベッド状遺構に幅8cm、深さ4cmにわたって掘り込まれる。主柱は2本で、西辺中央部には壁面に近接して、長軸90cm、短軸65cm、床面から・

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）

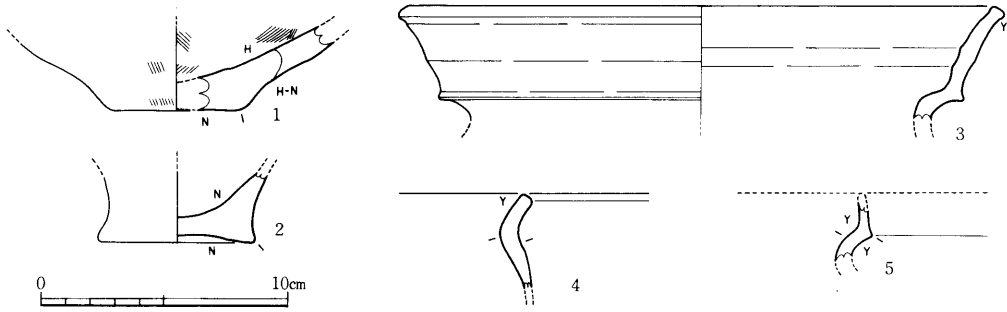


Fig. 25 第19号竖穴住居跡出土遺物実測図

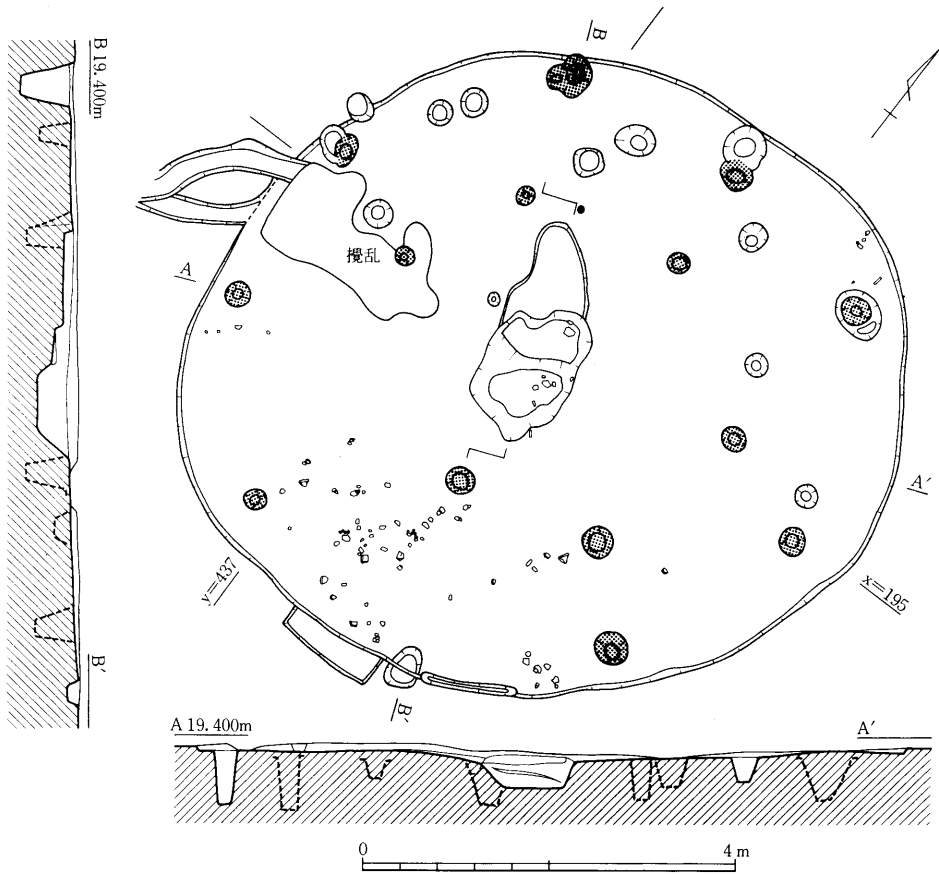


Fig. 26 第20号竖穴住居跡実測図

豎穴住居跡

の深さ25cmの規模をもつ平面形態長方形の土壙が存在する。壁面は熱変していないが、内部には木炭が充填しており、炉跡と考えられる。なお、東辺の中央部よりやや北では、ベッド状遺構が途切れており出入口が想定される。

出土遺物には弥生土器壺・甕、土師器甕などがあるが、前者は混入である。庄内新段階。

出土遺物 (Fig. 25, PL. 14)

1・2は弥生土器。1は不安定な小さな底部をもつ壺。2はやや上げ底になる甕の底部。

3～5は土師器。3・5は複合口縁の甕形土器。3は短い頸部から反転して斜外方へ外湾ぎみに開く口縁部をもつ。口縁部内外面は強い横ナデが施され、口縁端部は平坦面をもつ。4はしまりのない頸部から直線的に短く外反する口縁部をもつ甕。

第20号豎穴住居跡 (Fig. 26, PL. 9)

調査区の南部、第19号豎穴住居跡の東に位置する大形の住居跡である。平面形態は楕円形で、上面径685～775cm、床面積43.7㎡の規模をもつ。残存状態が悪く、検出面からの深さは2～6cmを残すにすぎない。支柱は周壁に近接して8本が配置されるが、さらにその内部には同心円状に5本の補助柱が存在する。床面中央には、長軸240cm、短軸95cm、最深部での床面からの深さ25cmの規模をもつ不整楕円形の炉跡が営まれる。

南端部には幅110cm、長さ20～35cmにわたって、出入口と考えられる住居外への張り出しが認められる。住居外に向かって階段状に高くなっており、床面からの高さは約5cmである。また、この張り出しの付近には周壁に沿って長さ約1m、床面からの深さ3cmの溝が巡るが、あまりにも小規模であることから、壁溝は基本的には造出されなかったものと考えられる。

出土遺物には弥生土器壺・甕・高坏、石核などがある。弥生時代中期前半。

出土遺物 (Fig. 27, PL. 14・20)

6～11は壺。6は口縁端部が上下両方にわずかにつまみ出され、拡張された端部の狭い平坦面にヘラによる鋸歯文を施文する。7は大きく開く口縁部をもち、口縁端部は下方につまみ出されるが、端部の平坦面には施文されない。8は鋤先状口縁をもつもので、斜上下方への拡張は未発達である。9はタマキ貝による羽状文の下位に、少なくとも4条のヘラ描き沈線が巡る。10は頸部の貼付突帯の頂部に刷毛状工具原体による斜格子文を施文する。11は張りの強いソロバン形の胴部をもち、胴部最大径の部位に断面三角形の突帯を1条貼付する。

12～21は甕。12は大形の甕で口縁端部をやや内巻きぎみにする。13～16は跳ね上げ口縁

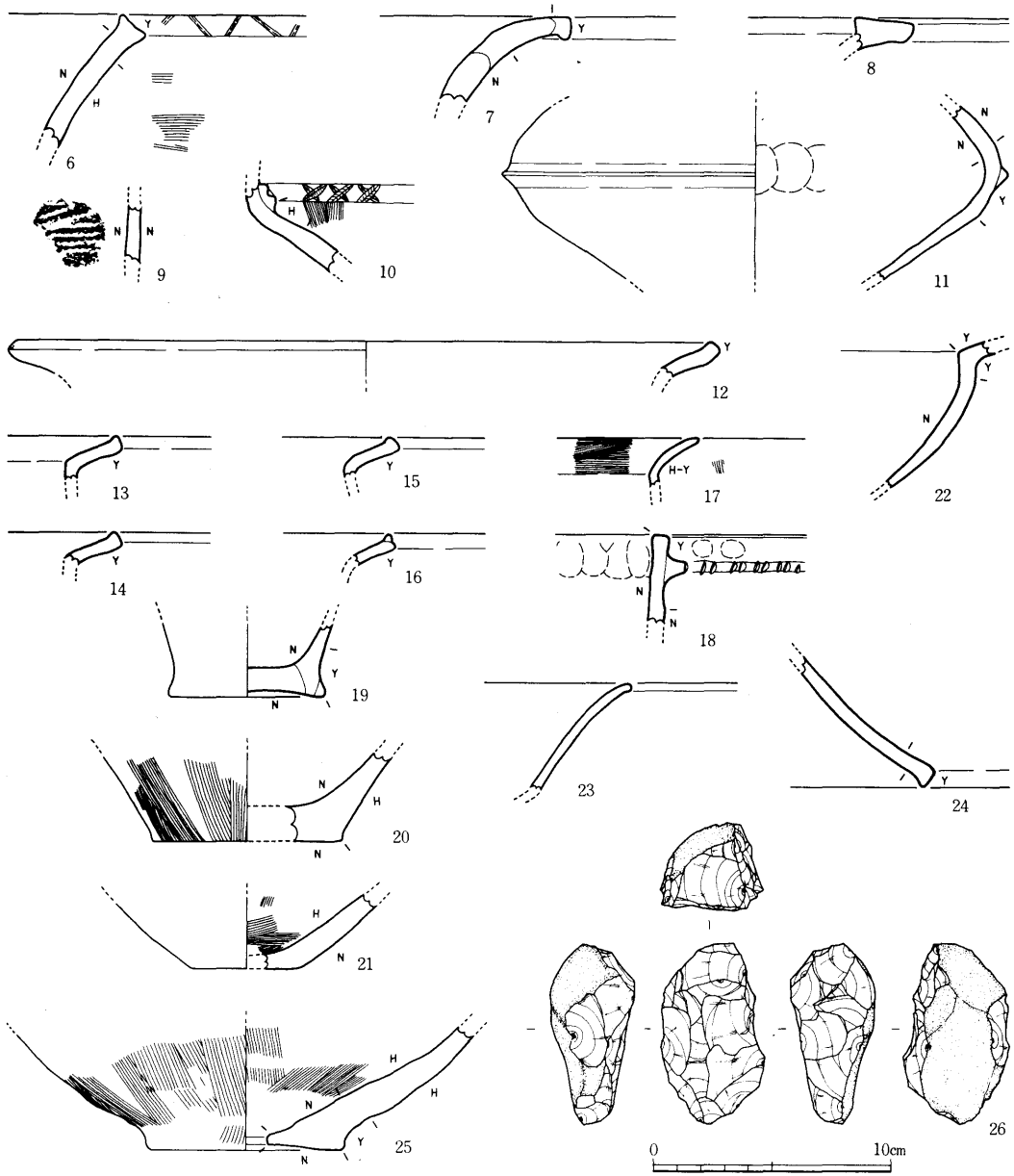


Fig. 27 第20号竪穴住居跡出土遺物実測図

で、口縁部は「く」の字に強く屈曲する。17は外湾しながら「く」の字に開く口縁部をもち、端部は尖る。18は下城式の甕で、口縁部外面に断面台形の貼付突帯を1条貼付する。突帯の頂部にはヘラによる刻み目を施す。口縁端部は平坦で、口縁部内外面は指圧痕が明

瞭に残る。19～21は底部。

22～24は高坏。22・23は坏部で、22は内弯する坏部をもち、口縁部は「く」の字に屈曲する。23は坏部の中位で反転し、外弯しながら開く口縁部をもち。24は脚裾部で、端部は肥厚して斜下方に下垂する。25は壺の底部を転用した甑で、底部中央を径約2cmにわたって焼成後に内外面から穿孔する。

26は石核。剥片剥離作業は裏面を除く各面で行なわれる。打面は一定しておらず、目的剥片は寸づまりの縦長剥片である。

第21号竪穴住居跡 (Fig. 28, PL. 10(1))

調査区の東部、第20号竪穴住居跡の東に位置する。東半部は遺跡保存地区外にあたるため完掘していないが、平面形態は不整形な隅丸長方形になるものと思われる。長軸530cm以上、短軸370cm以上の規模をもち、床面積は10㎡以上で、検出面からの深さは5cmである。南辺に接して床面には、住居の規模にくらべてやや大きめの炉が造出されている。内部には炭化木が随所に認められ、長軸125cm、短軸104cm、床面からの深さは24cmである。床面に柱穴は1個存在するが、深さが2cmで主柱穴とは考えられない。

住居の付属施設として、住居の周囲を弧状に巡る溝（第6号溝）が検出された。径は約18mで東半部は保存地区外にあたるため完掘していない。また、住居と溝の空間地には当住居に伴うと考えられる2基の土壙（第67・69号土壙）が並列して存在する。

出土遺物には弥生土器壺・甕がある。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 29, PL. 15)

27・28は壺。27は下垂する口縁部をもち、拡張部外面への施文はない。28は胴部最大径の部位に断面「M」字の貼付突帯を貼付する。

29・30は甕。29は逆「L」字形に強く屈曲する跳ね上げ口縁をもち。30は底部。

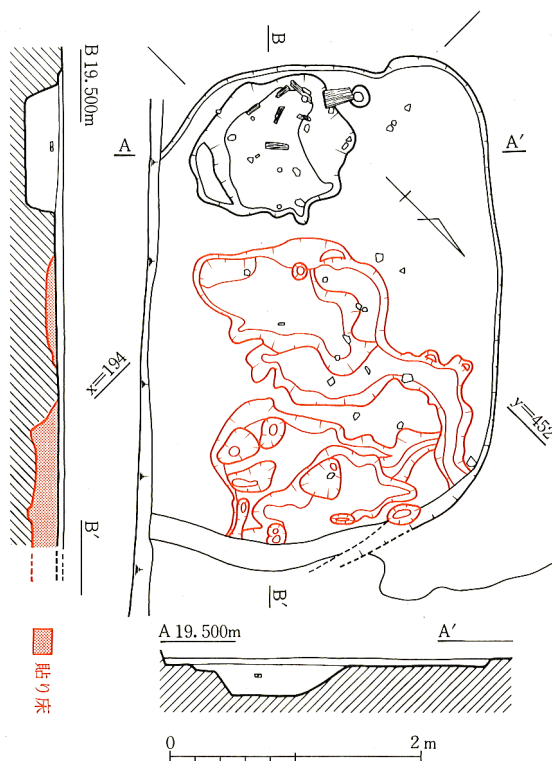


Fig. 28 第21号竪穴住居跡実測図

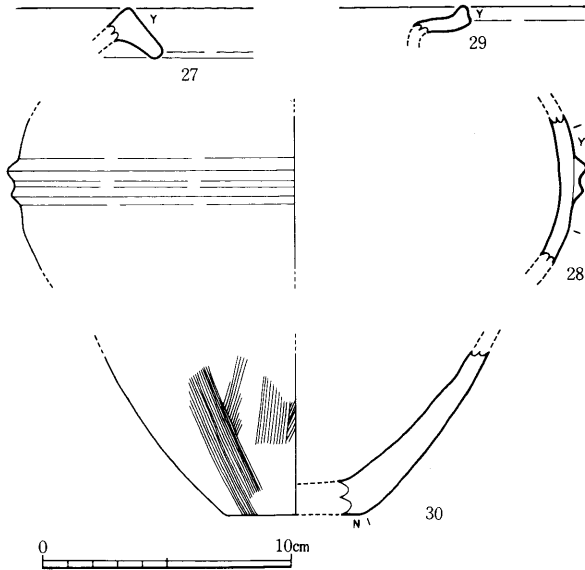


Fig. 29 第21号竪穴住居跡出土遺物実測図

(2) 土壙

第53号土壙

調査区西端部、第19号竪穴住居跡の北西に位置する小形の土壙である。平面形態は不整形な楕円形で、長軸66cm、短軸38cmの規模をもつ。壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは9cmである。長軸方向は北-南で、底面標高は約19.30m。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代後期。

出土遺物 (Fig. 31-31, PL. 15)

張りの少ない胴部に「く」の字

に強く屈曲する口縁部をもつ小形の甕。口縁端部は内面の強い横ナデによってやや肥厚し、上方に突出ぎみになる。

第54号土壙 (Fig. 30, PL. 10(2))

調査区西端部、第19号竪穴住居跡の北西に位置する。平面形態は不整楕円形で、長軸176cm、短軸104cmの規模をもつ。壁面の立ち上がりは緩やかで、検出面からの深さは10cmである。長軸方向は北西-南東で、底面標高は約19.20m。

出土遺物には弥生土器甕、敲石などがある。弥生時代中期。

出土遺物 (Fig. 31-32~34, PL. 15・21)

32・33は甕。32は逆「L」字形に強く屈曲する口縁部をもつ。33は頸部下位に断面三角形の1条の貼付突帯が巡り、突帯の頂部には指頭による押圧によって幅広の刻目を施す。34は円礫を素材とする敲石で、約1/2を欠損する。正裏両面の中央部には浅い敲打痕が認められる。

第55号土壙 (Fig. 30)

調査区の北部、第14号竪穴住居跡の北東に位置する。平面形態は楕円形で、長軸96cm、短軸67cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10cmで、底面標高は約19.20m。長軸方向は北東-南西。出土遺物はなく、時期不明。

土 壙

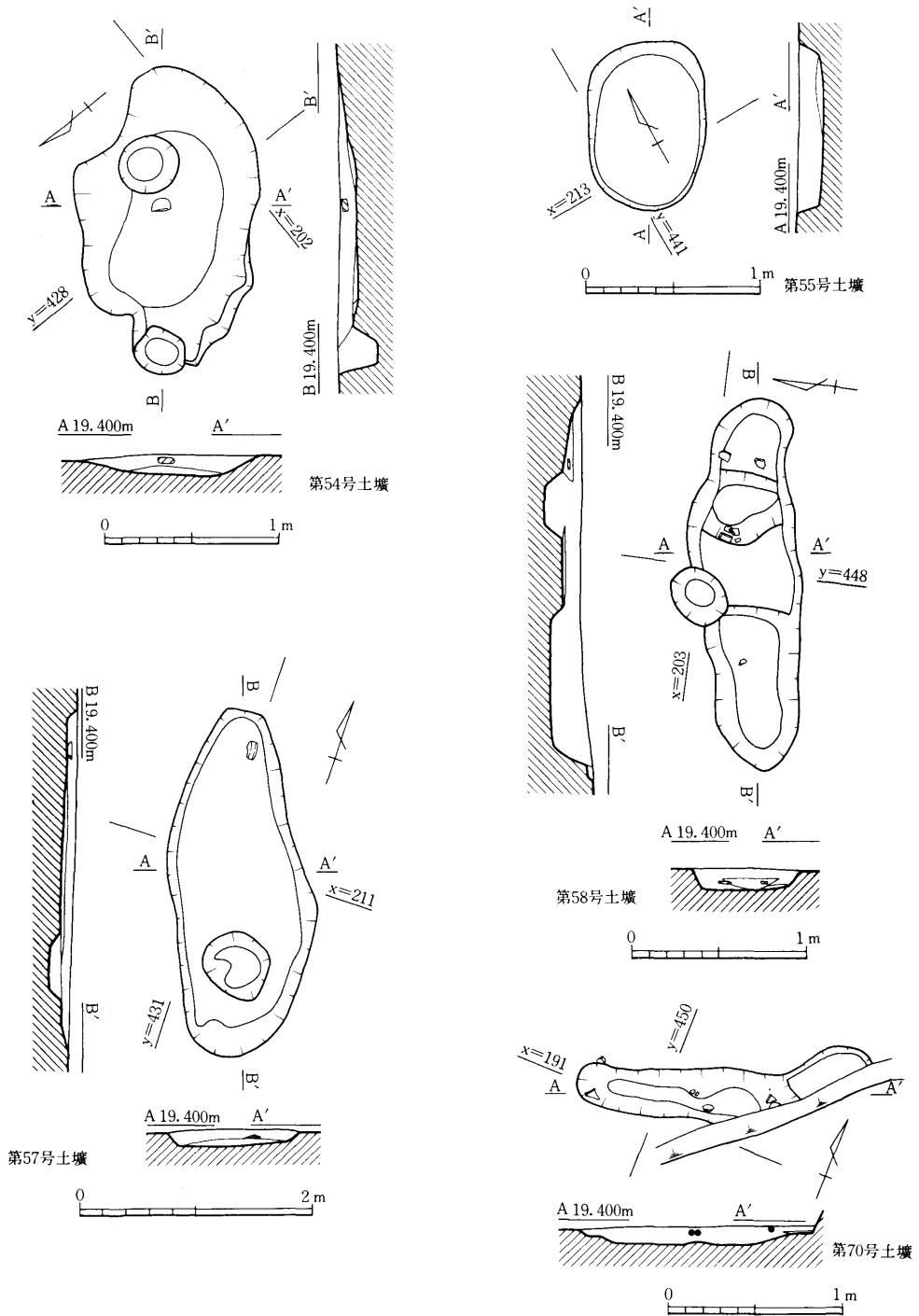


Fig. 30 第54・55・57・58・70号土壙実測図

第56号土壙（PL. 10(3)）

第55号土壙の東に隣接する小形の土壙である。平面形態は円形に近く、径約60cmの規模をもつ。検出面からの深さは約15cmで、底面標高は約19.20m。

出土遺物には弥生土器壺・甕などがある。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig. 31-35~37, PL. 15）

35はソロバン状の胴部をもつ長頸壺。36・37は跳ね上げ口縁となる甕で、口縁端部外面は強い横ナデによって窪みぎみになる。

第57号土壙（Fig. 30, PL. 11(1)）

第56号土壙の南に隣接する、平面形態が不整な長楕円形を呈する土壙である。長軸298cm、短軸116cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10cmで、底面標高は約19.20m。長軸方向は北西-南東。底面には柱穴状の掘り込みが存在するが、本土壙に伴うものかどうか不明。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代中期中頃。

出土遺物（Fig. 31-38, PL. 15）

口縁部が「く」の字に屈曲する甕で、口縁端部は肥厚する。頸部直下に断面三角形の突帯を1条貼付する。

第58号土壙（Fig. 30, PL. 11(2)）

調査区の中央部、第20号堅穴住居跡の北東に位置し、第59号土壙によって切られている。平面形態は不整形な長楕円形で、長軸210cm、短軸61cmの規模をもつ。検出面からの深さは最深部で23cmで、底面標高は約19.05m。長軸方向は東-西。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代中期中頃~後半。

出土遺物（Fig. 31-39・40, PL. 15）

39・40は甕。39は「く」の字に屈曲する口縁部をもち、口縁端部は内面の強い横ナデによって跳ね上げ口縁ぎみになる。40は安定した平底の底部。

第59号土壙（Fig. 32, PL. 11(2)）

平面形態が不整形な土壙で、第58号土壙と切り合い関係にある。長軸306cm、短軸80cmの規模をもち、検出面からの深さは最深部で17cmである。底面標高は約19.05m。長軸方向は北東-南西。

出土遺物には弥生土器甕・高坏などがある。弥生時代後期前半。

出土遺物（Fig. 31-41~44, PL. 15）

41~43は甕。41はしまりのない頸部から「く」の字にゆるやかに外反する口縁部をもつ。

土 壙

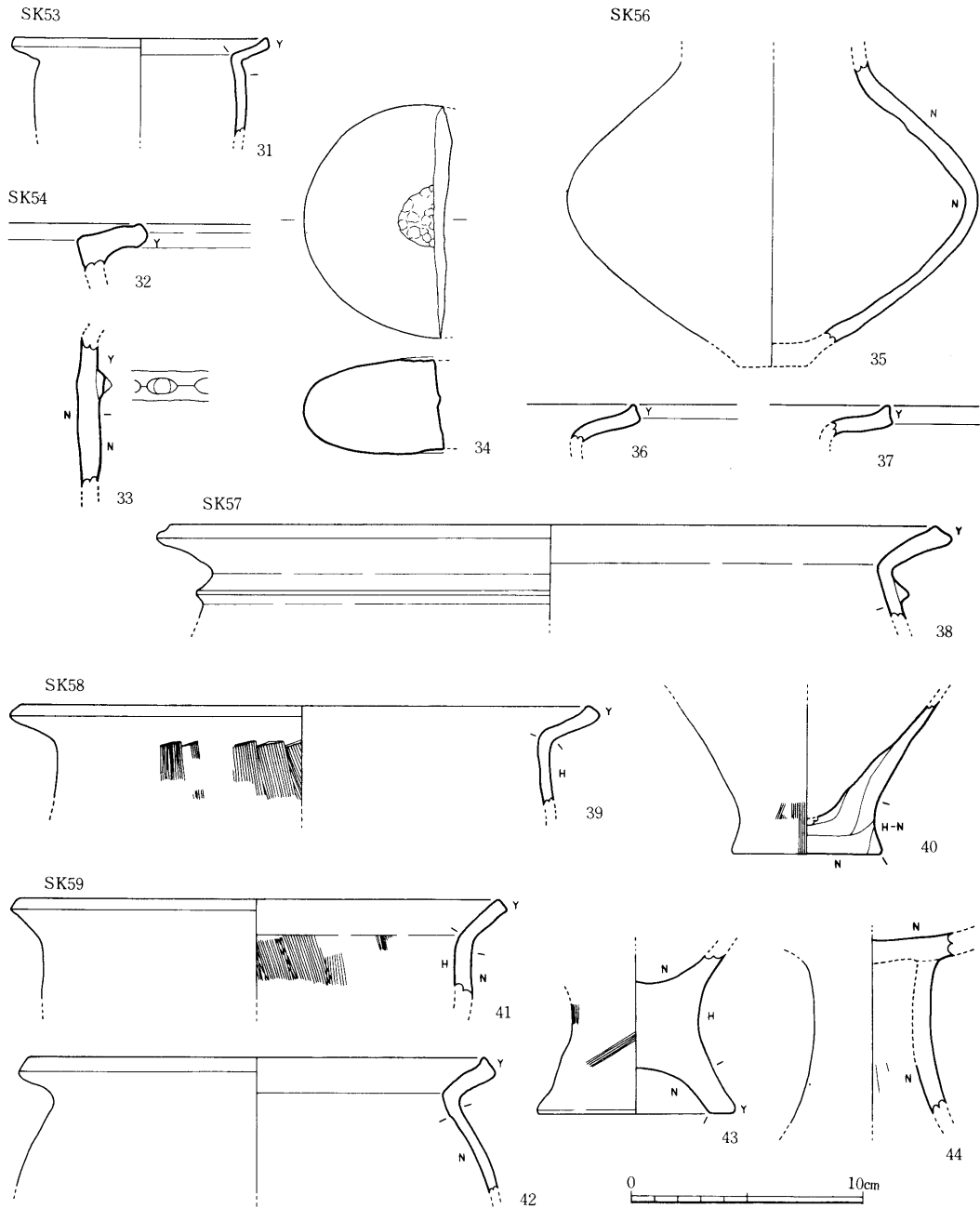


Fig. 31 第53・54・56～59号土壙出土遺物実測図

42は「く」の字に外反する短い口縁部をもつ。口縁端部は肥厚し、跳ね上げ口縁ぎみになる。43は上げ底の底部。44は高坏の脚部。脚部は中空で、坏部に脚部を接合する。

第60号土壌 (Fig. 32)

第58・59号土壌の南西に位置し、第61号土壌によって切られている。平面形態は不整形な長楕円形で、長軸163cm、短軸48cmの規模をもつ。底面は北から南へ階段状に低くなっており、検出面からの深さは最深部で12cmである。底面標高は約19.10m。長軸方向は北-南。出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片のため図化できない。

第61号土壌 (Fig. 32)

第60号土壌を切る小形の土壌である。平面形態は不整形な円形で、長軸91cm、短軸66cmの規模をもつ。底面は平坦で、検出面からの深さは15cmである。底面標高は約19.05m。長軸方向は北東-南西。

出土遺物はなく、時期不明。

第62号土壌

調査区の南端部、第20号竪穴住居跡の南に隣接して位置する。平面形態は不整形な楕円形で長軸206cm、短軸106cmの規模をもつが、2基の土壌が重複している可能性がある。底面は平坦で、検出面からの深さは15cm。底面標高は約19.20m。長軸方向は北西-南東。

出土遺物はなく、時期不明。

第63号土壌 (Fig. 32)

第62号土壌の南に隣接して位置する、平面形態が不整形な土壌である。東端部は第9号溝によって切られており、西端部は一部攪乱を受けている。平面形態が長楕円形の2基の土壌が重複している可能性があるが、調査時には切り合い関係が判然としなかったため、一括して取り扱った。南北軸116cm、東西軸169cmの規模をもち、検出面からの深さは東半部で4cm、西半部で31cmで、両底面とも平坦である。西半部の壁面の立ち上がりは急で、底面標高は東半部で約19.25m、西半部で約18.95mである。

出土遺物はないが、切り合い関係から弥生時代中期以前のものである。

第64号土壌 (Fig. 33)

第63号土壌の東に隣接して位置し、第9・10号溝を切っている。平面形態は不整形な楕円形で長軸123cm、短軸70cmの規模をもつ小形の土壌である。検出面からの深さは18cmで、底面標高は約19.10m。長軸方向は東-西。

出土遺物はないが、切り合い関係から弥生時代中期以降のものである。

第65号土壌 (Fig. 33, PL. 11(3))

第64号土壌の南東に位置し、第10号溝を切っている。平面形態は楕円形状を呈し、長軸

土 壙

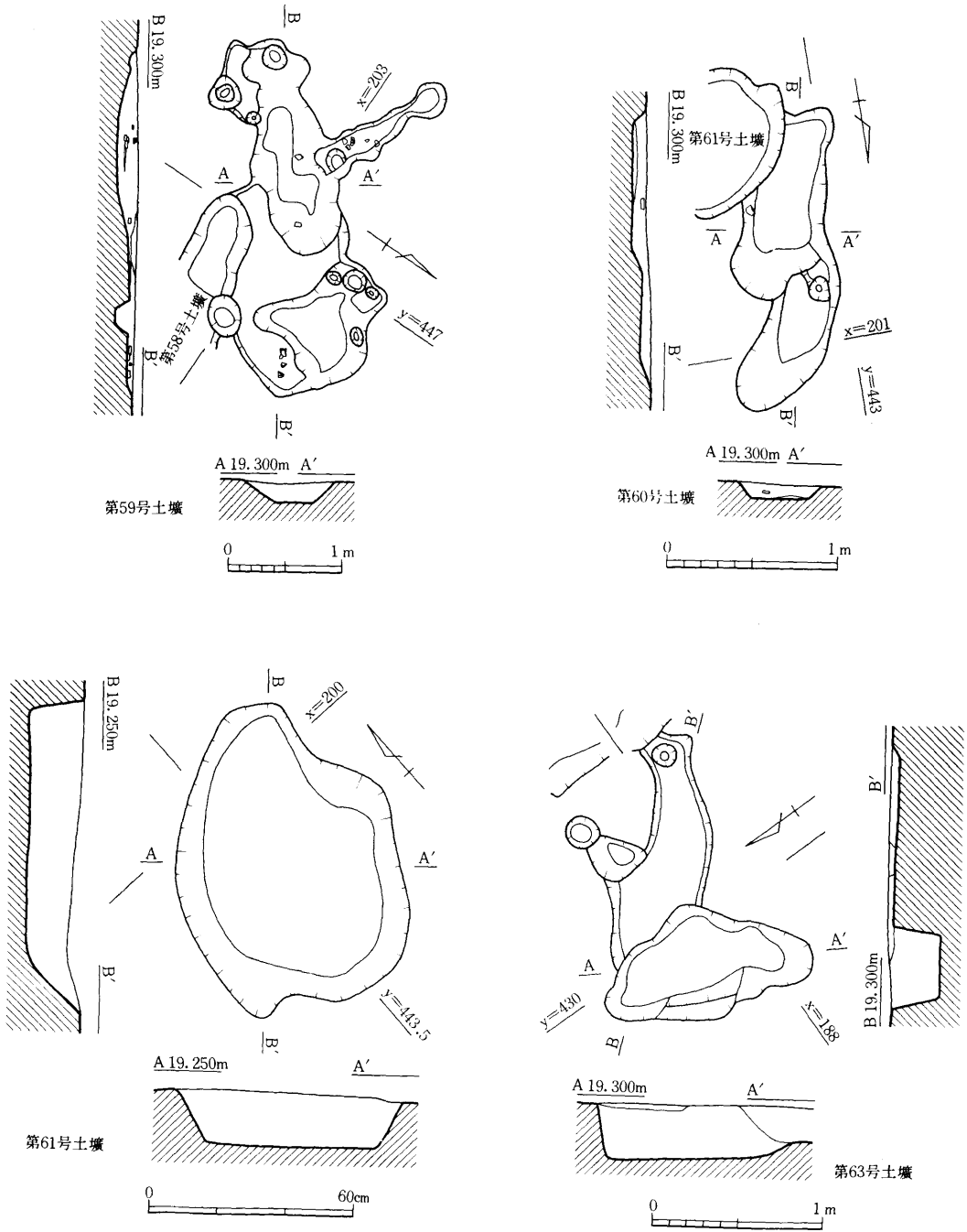


Fig. 32 第59~61·63号土壙实测图

215cm、短軸125cmの規模をもつ。検出面からの深さは15cmで、底面標高は約19.35m。長軸方向は北東－南西。

遺物は底面付近から弥生土器が若干出土したが、いずれも小片のため図化できない。

第66号土壙（Fig. 33, PL. 11(3)）

第65号土壙の南東に隣接して位置する。吉田遺跡調査団のトレンチによって東半部が消失している。平面形態は隅丸長形状を呈するものと思われ、長軸150cm以上、短軸40cm以上の規模をもつ。検出面からの深さは8cmで、底面標高は約19.35m。長軸方向は北東－南西。底面には数個の柱穴が存在するが、本土壙に伴うものではなく、後世のものである。

遺物は弥生土器甕などが若干出土した。弥生時代中期。

出土遺物（Fig. 34－54, PL. 20）

上げ底の甕の底部で、内外面とも縦刷毛目仕上げ。

第67号土壙（Fig. 33, PL. 11(4)）

調査区の中央部からやや南東、第21号竪穴住居跡の周囲を巡る溝（第6号溝）の内部に位置し、第69号土壙と並列する。平面形態は不整形な隅丸長方形ないしは楕円形状を呈し、長軸104cm、短軸61cmの規模をもつ。南半部には平坦面をもち検出面からの深さは9cmであるが、北半部は播鉢状にさらに25cm落ち込んでいる。最深部の底面標高は約19.05mで、長軸方向は北東－南西。

遺物は底面からやや上位で弥生土器が出土したが、小片のため図化できない。

第68号土壙

第67号土壙の北に位置する、平面形態が不整形な土壙である。長軸140cm、短軸57cmの規模をもつ。検出面からの深さは10cmで、底面標高は約19.10m。長軸方向は北東－南西。

出土遺物はなく、時期不明。

第69号土壙（Fig. 35, PL. 11(4)）

第21号竪穴住居跡の周囲を巡る溝（第6号溝）の内部に位置し、第67号土壙と並列する。平面形態は不整形な隅丸長方形ないしは楕円形状を呈し、長軸127cm、短軸61cmの規模をもつ。壁面の立ち上がりは比較的急で、検出面からの深さは28cmである。底面は平坦で、標高は約19.05m。長軸方向は北東－南西。

検出地点、土壙の時期、配列状況、規模、構造などから第67号土壙とともに第21号竪穴住居跡に付設するものと考えられる。

遺物は比較的多く、弥生土器壺・甕・高坏などが底面から約25cm上位で集中して出土し

土 壙

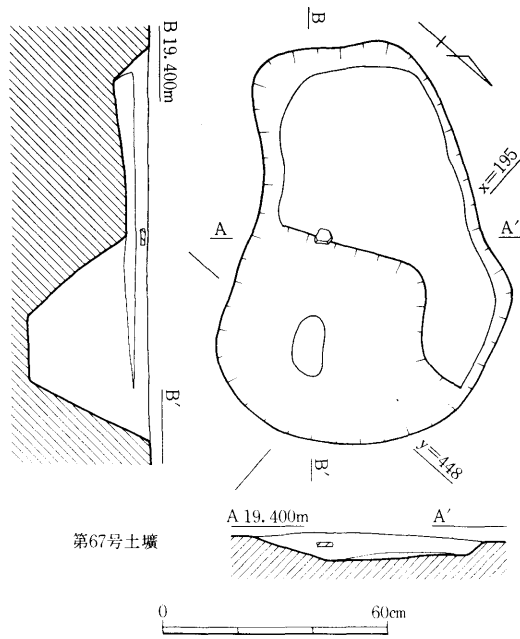
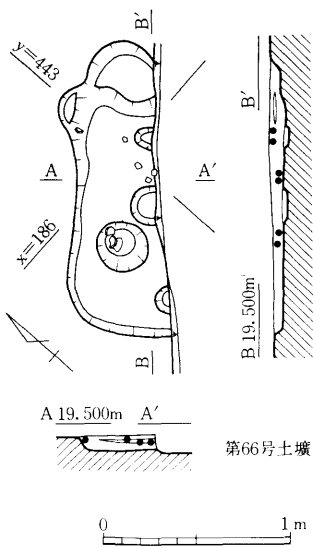
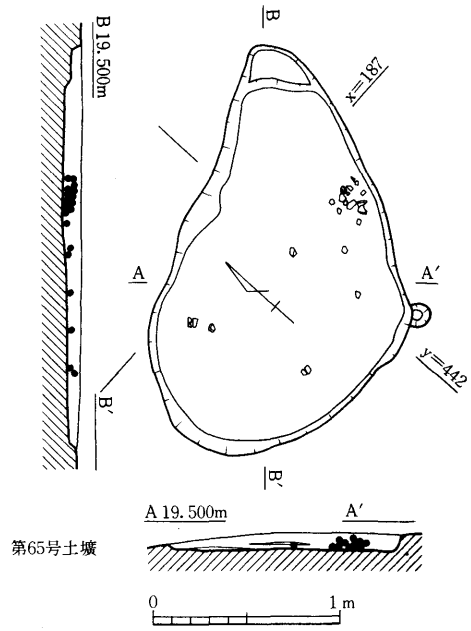
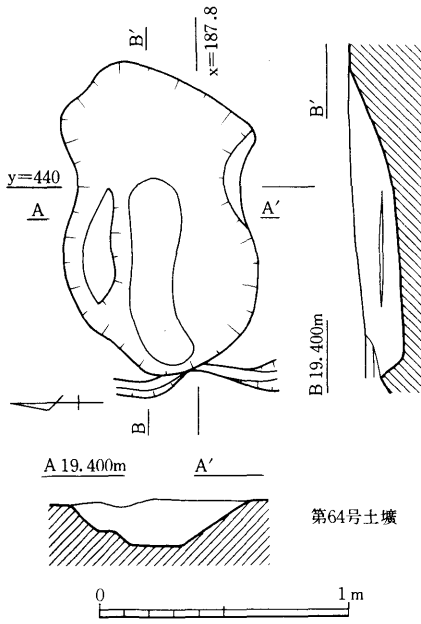


Fig. 33 第64~67号土壙实测图

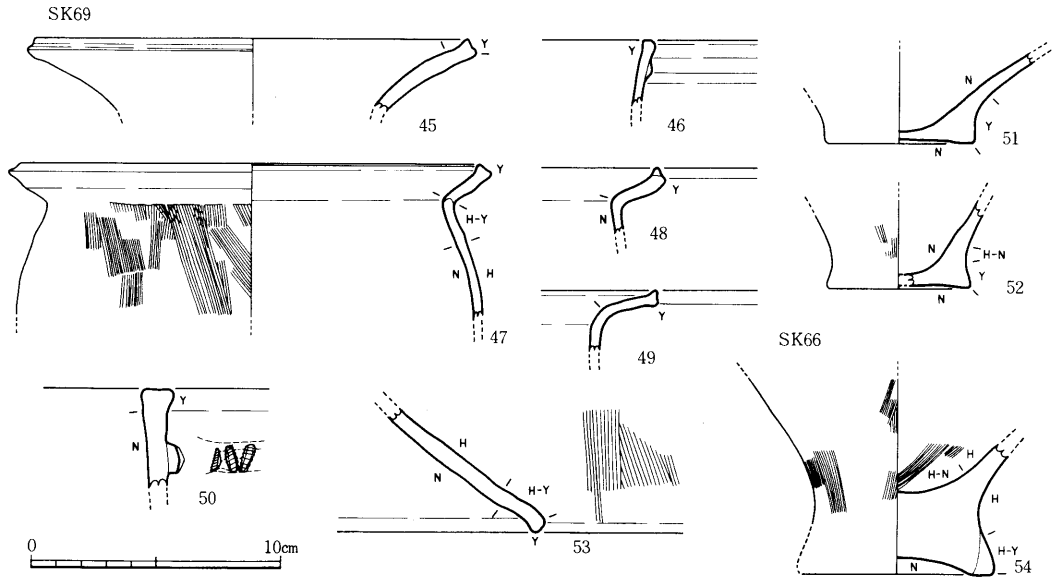


Fig. 34 第66・69号土壙出土遺物実測図

た。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 34-45~53, PL. 15・16)

45・46は壺。45は大きく開く口縁部をもち、口縁端部は強い横ナデによって窪む。46は直立する口縁部をもつ長頸壺で、外面には口縁端部よりやや下位に断面三角形の扁平な貼付突帯が1条巡る。口縁端部は平坦におさめる。

47~52は甕。47~49は跳ね上げ口縁をもつもの。47は口縁部が直線的に開くが、48は口縁端部付近で内弯する。49はしまりのない頸部から逆「L」字に開く口縁部をもつ。50は下城式の甕。口縁部のやや下位に断面五角形の貼付突帯を1条貼付し、突帯の頂部には刷毛原体による刻目を施す。口縁端部は平坦で、肥厚する。51・52は上げ底ぎみの底部。

53は高坏の脚裾部で、端部がわずかに下垂する。

第70号土壙 (Fig. 30)

調査区の南西部、第21号竪穴住居跡の南に位置する。東への延長部分は遺跡保存地区外にあたるため検出してない。平面形態は不整形な長楕円形を呈し、平面形態、規模などから溝の可能性はあるが、ここでは土壙として取り扱う。長軸133cm以上、短軸28cmの規模をもつ。底面は極めて狭く、検出面からの深さは10cmである。底面標高は約19.25mで、長軸方向は東-西。

遺物は底面から上位で弥生土器が若干出土した。弥生時代。

(3) 溝

第6号溝 (Fig. 23・36, PL. 12)

調査区の南部に位置し、第21号竪穴住居跡の周囲を弧状に巡る溝である。住居と溝の内縁との距離は西辺からは約7.6m、北辺からは約5.9m、東辺からは約4.6mである。南半部は保存地区外にあたるため検出していないが、径約18mの規模をもつものと考えられる。西端部は後世の削平、および他の遺構との重複によって途切れるが、幅は約100~120cm、検出面からの深さは8~18cmである。断面形は逆台形で、溝底標高はおおむね19.20mである。

なお、溝の内側にある住居跡と溝の空間地には当住居に伴うと考えられる2基の土壙が並列して存在する。

遺物は溝底から多量に出土し、弥生土器壺・甕・鉢などの土器類のほか、石鏃・二次加工のある剥片がある。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 37・38, PL. 16~18・20・21)

55~67は壺。55・56は鋤先状口縁をもつもので、拡張部は下垂する。55は口縁端部の内方への張り出しが比較的強く、拡張部外面の内側寄りに扁平な円形浮文を貼付する。57・58は斜め下方に短く下垂する口縁部をもつ。57は口縁端部に面をもち、拡張部外面には施文はなされない。58は口縁端部を尖りぎみにおさめ、拡張部外面にはヘラによる斜格子文を施文する。59~61は直線的あるいは外弯しながら大きく開く口縁部をもつ。59は頸部外面に突帯の剥落痕が認められる。60は口縁端部内面に断面三角形の粘土帯を貼付し、肥厚させる。61も口縁端部内面に突帯の剥落痕が認められることから、60と同様な口縁端部をもつものと思われる。62は短く直立する口縁部をもち、中位でさらに外方に開く。端部は丸い。内外面の整形は粗雑。64~67は底部。いずれも安定した平底で、64は内面が刷毛状工具による擦過によってヘラ削り風に仕上げられ、胴部外面には煤が付着する。

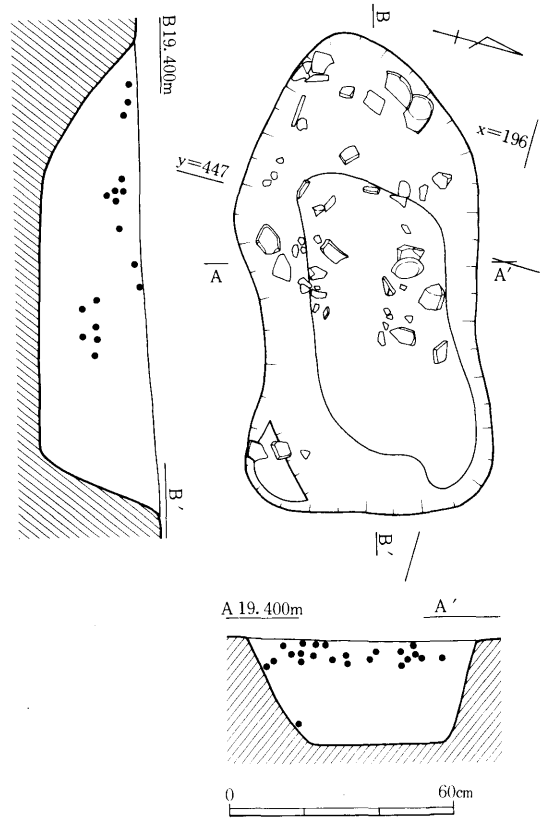


Fig. 35 第69号土壙実測図

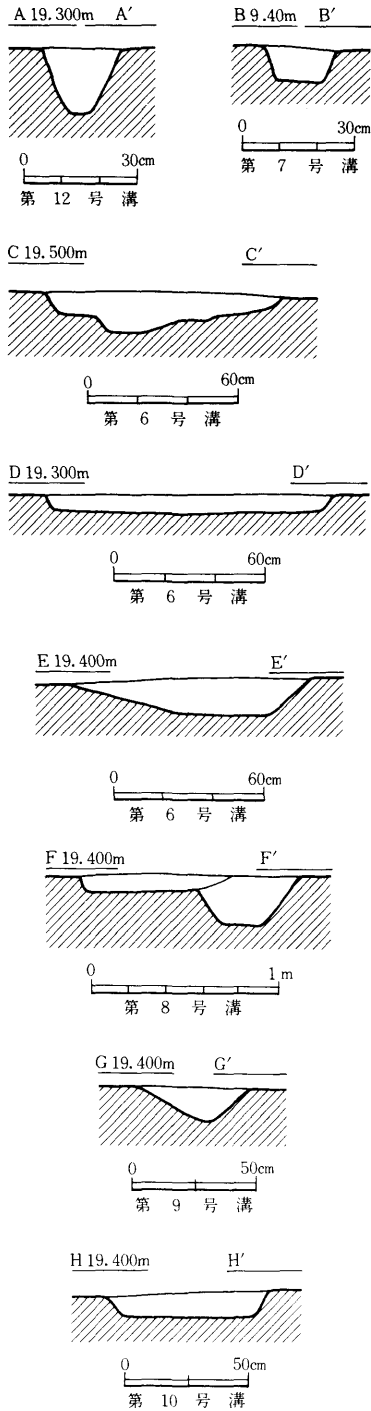


Fig. 36 溝断面実測図

68～80は甕。68～71は跳ね上げ口縁をもつもので、口縁部は大半が「く」の字に開くが、69は逆「L」字形に強く屈曲する。72～75は「く」の字に開く口縁部をもつ。76は小形の甕で、球形の胴部に外弯しながら短く開く口縁部をもつ。77～80は底部。やや上げ底ないしは窪み底で、側面が裾広がりになるもの（77・78）と胴部からそのまま底部へ移行するもの（79・80）とがある。

81は鉢。胴部最大径は頸部径を上回ることなく、口縁部は逆「L」字形に強く屈曲する。

82～85は高坏。82・83は脚部上半で、82は坏部に脚部を接合するタイプであろう。84・85は脚裾部。84は蓋かもしれない。85は緩やかに外弯しながら裾端部に移行する。

86は平基無茎式の石鏃。周縁に二次加工が施されるが、正裏両面の中央部には素材面を残しており、剥片鏃と考えられる。87は扁平な横長の盤状剥片を素材とし、正面右側縁下半に二次加工を施す。正面側が主要剥離面で、打点を除去している。剥片剥離の打面は、正面左側縁の単設の平坦打面である。削器としての機能をもつものであろう。

第7号溝 (Fig. 23・36)

調査区の南部を東一西に走行する溝で、東西への延長部分は削平、攪乱によって消失している。弧状に巡ることから竪穴住居跡の壁溝の可能性はあるが、溝の内側に支柱に相当する柱穴が存在しないことから、単一の溝として取り扱った。検出長は約4.3mで、溝幅約20cm、検出面からの深さは最深部で約10cmである。断面形は逆台形で、溝底標高は約19.10～19.20m。

遺物は弥生土器が若干出土したが、図化できない。

溝

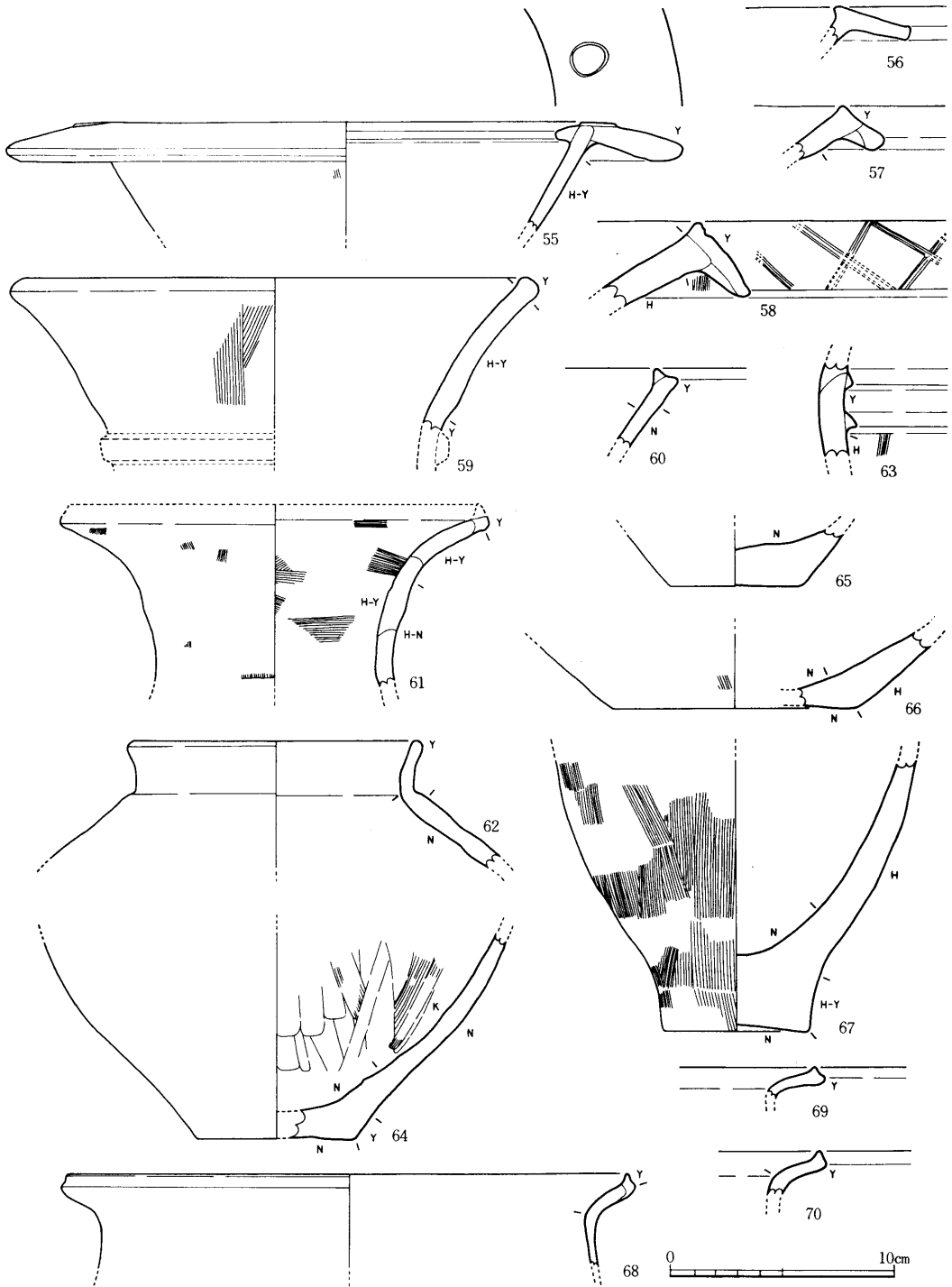


Fig. 37 第6号溝出土遺物実測図(1)

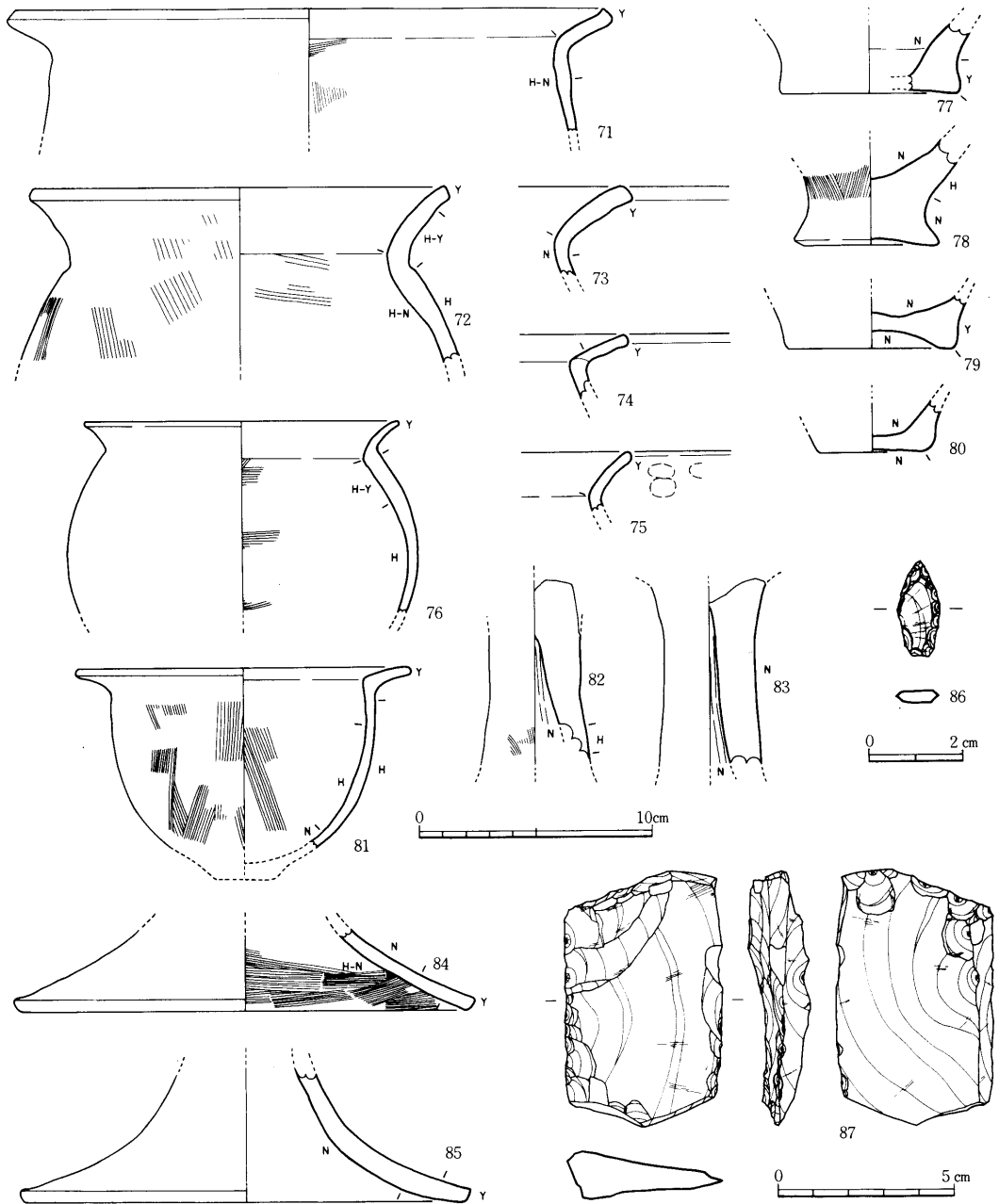


Fig. 38 第6号溝出土遺物実測図(2)

第8号溝 (Fig. 23・36)

調査区の南部を北西-南東に直線的に走行する溝で、南東への延長部分は遺跡保存地区

柱 穴

外にあたるため検出していない。検出長は約7mで、溝幅は南東部で約80cm、北西部では溝幅を減じ、約50cmとなる。検出面からの深さは最深部で10cm、溝底標高は約19.30mである。断面形は逆台形を呈する。

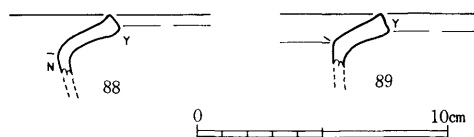


Fig. 39 第9号溝出土遺物実測図

出土遺物には土師器、須恵器などが若干あるが、小片のため図化できない。古墳時代。

第9号溝 (Fig. 23・36)

調査区の南端部を北-南に直線的に走行する溝で、南への延長部分は攪乱、北への延長部分は削平によって消失している。検出長は約7mで、溝幅は南部で約60cm、北部では溝幅を減じ、約30cmとなる。検出面からの深さは最深部で約15cmで、溝底標高は約19.20m。溝底は狭く、断面形は「V」字形に近い逆台形を呈する。

出土遺物には弥生土器甕などがある。弥生時代中期後半。

出土遺物 (Fig. 39, PL. 17)

2点とも「く」の字に外反する甕の口縁部。88は跳ね上げ口縁、89は短く開く口縁部をもち、口縁端部がわずかに肥厚する。

第10号溝 (Fig. 23・36)

調査区の南端部をやや西に湾曲しながら北-南に走行する溝である。第9号溝と並列するが、南への延長部分は保存地区外にあたるため検出していない。検出長は約8mで、溝幅は南部で約100cm、北部では溝幅を減じ、約60cmとなる。検出面からの深さは最深部で約10cmで、溝底標高は約19.20m。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片のため図化できない。

第12号溝 (Fig. 23・36)

調査区の中央部付近を北西-南東に直線的に走行する溝である。南東への延長部分は削平によって消失している。第2次調査で北半部を検出しており、総検出長は約17mにおよぶ。溝幅は約20~30cmで、検出面からの深さは約10~20cm、溝底標高は19.05~19.15mである。断面形は逆台形を呈する。

第2次調査時には、竪穴住居跡との切り合い関係から弥生時代中期後半以降と考えたが、今回、土師器が若干出土し、古墳時代のものであることが明らかになった。

(4) 柱穴

調査区のほぼ全面で多数検出した。径は約20~30cm前後のものが大半を占める。出土遺

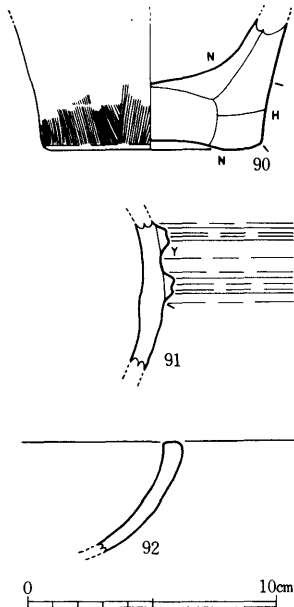


Fig. 40 柱穴出土遺物実測図

物、他の遺構と切り合い関係などから、弥生時代から古墳時代にかけてのもので、竪穴住居跡の主柱穴となるものも含まれていると思われるが、柱穴配置による遺構の復原はできなかった。遺物は34個の柱穴から出土したが、図化できたのは以下の3点にすぎない。

出土遺物 (Fig. 40, PL. 18)

90・91は弥生土器。90は甕の底部。窪み底で、外面は縦刷毛目仕上げ。P 1 出土。91は壺。胴部最大径の部位に断面台形の少なくとも2条の貼付突帯を貼付する。突帯の頂部は強い横ナデによって窪ませる。P 2 出土。92は土師器の鉢ないしは碗。胴部から口縁部まで内弯しながら立ち上がり、口縁端部は平坦におさめる。P 3 出土。

(5) 河川跡 (Fig. 41, PL. 13(3))

調査区の東に位置し、南東から北西に走行する河川跡で、第1・2次調査ですでに北への延長部分を検出している。一部重複する部分があるが、第2次調査で分流する同一河川の本流と支流であることが明らかとなった。

完掘はしていないが、トレンチによって部分的に規模、土層の堆積状況、遺物の出土状況を確認した。東側の南半部は配管工事によって削平され、消失している。北部では、東側で幅約1.2m、検出面からの深さ約75cm、西側で幅約2.7m、検出面からの深さ約70cmの規模をもつ。南に向かうにつれて規模が大きくなり、最大幅は約10mにもおよぶ。南部では東側で幅約5m以上、検出面からの深さ約80~100cm、西側で幅約4.0m、検出面からの深さ約80~95cmの規模をもつ。埋積土は砂礫、黒色粘土が主体で、黒色粘土は多量の植物遺体を含んでいた。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、鞆の羽口などがあり、この河川が機能していたのは古墳時代後期~奈良時代と考えられる。

出土遺物 (Fig. 42, PL. 18~21)

93~108は河川跡西側出土のもの。

93・94は弥生土器の壺。93は肩部外面に1条の浅いへら描き沈線が巡る。胴部は張りが小さく、外面は縦刷毛目、内面は基本的にはへらミガキであるが、内面下半はへらミガキ

河川跡・土器溜り

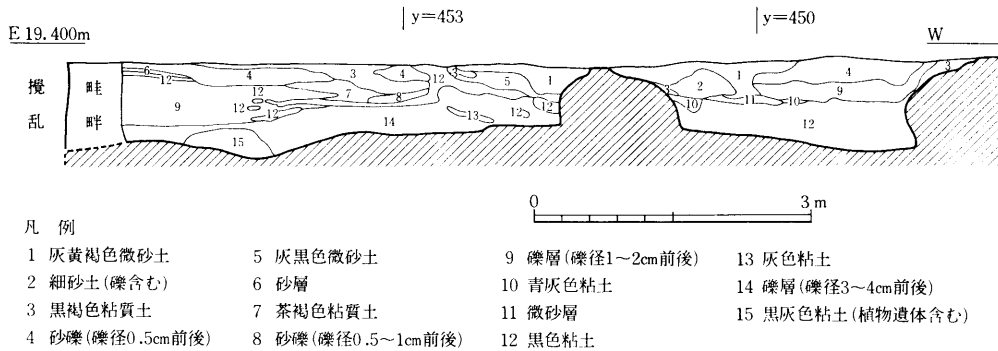


Fig. 41 河川跡土層断面実測図

ののち縦、横刷毛目仕上げを行なう。94は頸部で、93同様、外面に浅い1条のヘラ描き沈線が巡る。内面はヘラミガキ。

95~98は土師器の甕。95は口縁端部に水平な面をもつ布留タイプの甕。96は丸底の底部で、内外面には粗雑なナデが施される。97・98は外弯しながら短く「く」の字に開く口縁部をもつ。口縁端部は丸いもの(97)と尖りぎみのもの(98)がある。

99~108は須恵器。99~101は坏蓋。99は直線的にのびる体部から、口縁部が斜下方に短く開く。100は平坦な天井部の外面に平行タタキが認められる。101は大形品で、口径に比べて器高が低く扁平である。102~108は坏身。全形がわかるのは102で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部と体部の境には断面台形の高台を貼付する。接地点は高台内側端である。103は口縁部で、口縁端部は内面を面取り風にし、尖りぎみになる。104~108は底部。高台は底部と体部の境に貼付するもの(104)と底部と体部の境より内側に貼付するもの(105~108)とがある。108は粘土帯を二度にわたって貼付し、高い高台をつくりだす。

109~112は河川跡東側出土のもの。

109は弥生土器の壺ないしは鉢。110は上げ底の甕の底部。外面は縦刷毛目ののち、ヘラナデが施される。111は須恵器の坏身。立ち上がりは中位で上方に屈曲する。112は甕の羽口。火口部分で、上端部は尖らずやや丸みをもつ。厚さは0.6~0.8cmで、薄手。外面、上端部および内面の一部に滓が付着する。

(6) 土器溜り (Fig. 23, PL. 13(1)(2))

調査区の東端部に位置し、河川跡に設定した南端部のトレンチで検出した。第6号溝に近接し、規模は未確認であるが、不整形な掘り込みが連続する。検出面からの深さは45cm

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）

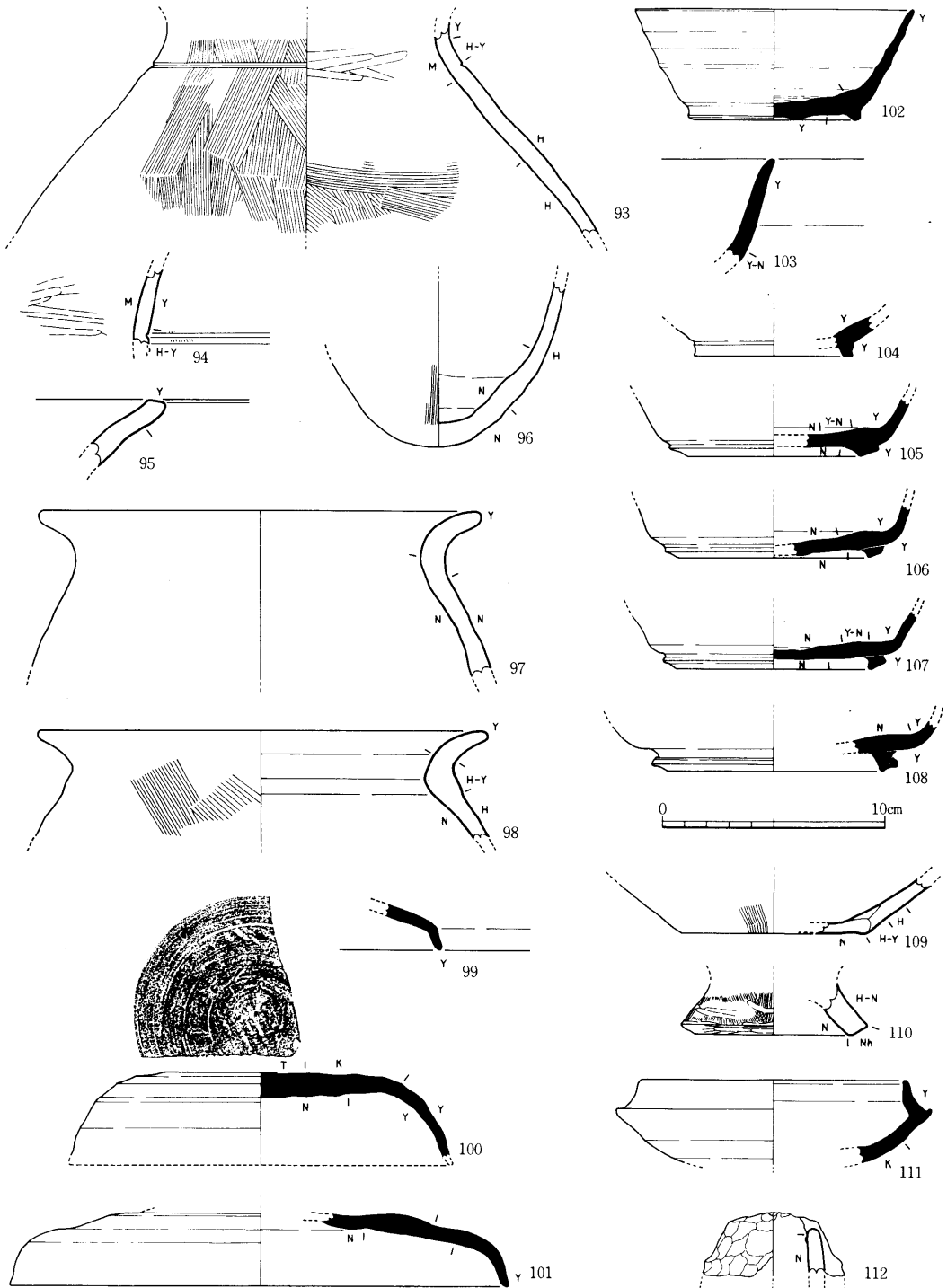


Fig. 42 河川跡出土遺物実測図

土器溜り

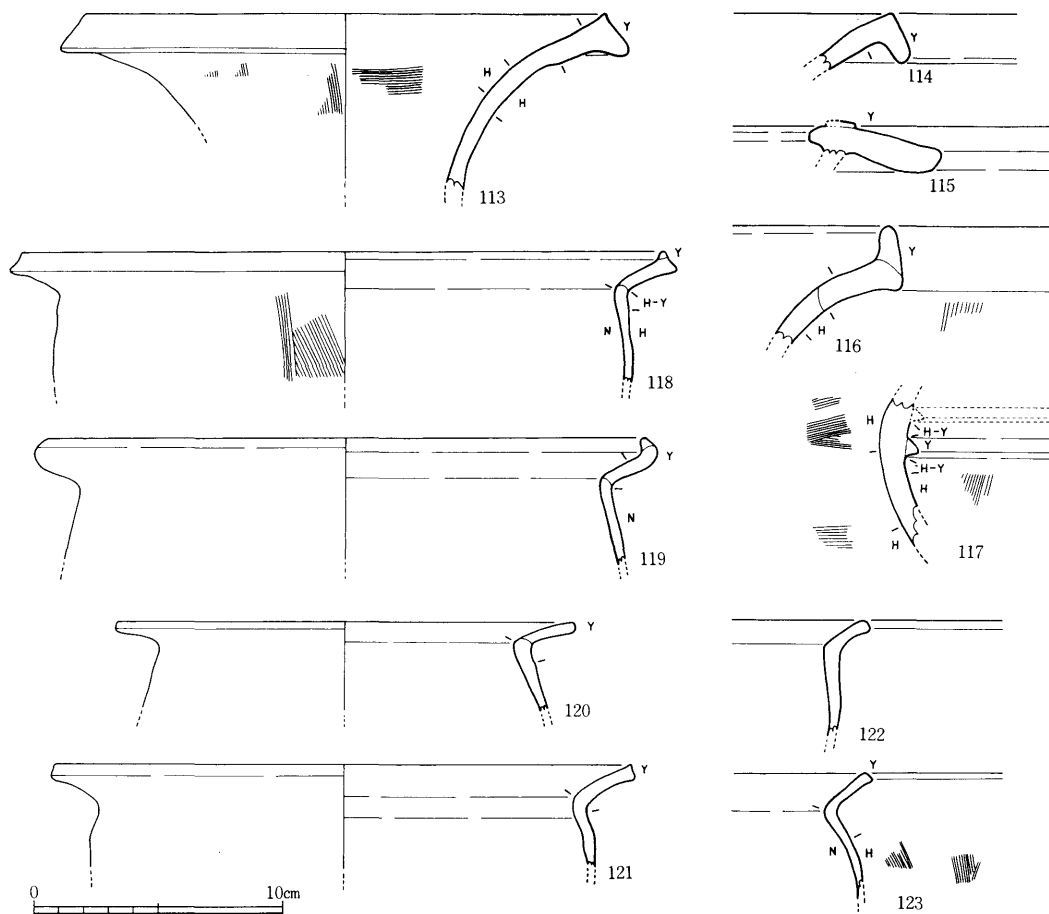


Fig. 43 土器溜り出土遺物実測図 (1)

である。

出土遺物には弥生土器壺・甕・鉢、剥片などがある。

出土遺物 (Fig. 43・44, PL. 19~21)

113~117は壺。113・114は下垂する口縁部をもち、拡張部外面には施文はない。113は下垂度が小さく、口縁端部は尖りぎみに終わる。115は鋤先状口縁になるもので、下垂する口縁部の拡張部外面の内側寄りに円形浮文を貼付する。口縁部の内側への張り出しは強い。116は口縁端部が上方に立ち上がる。117は頸部外面に断面三角形の貼付突帯を少なくとも2条貼付する。

118~127は甕。118・119は跳ね上げ口縁になるものである。前者は口縁部が直線的に開くが、後者は内弯しながら開く。119は外面と口縁部内面の上半に、部分的に煤が付着する。

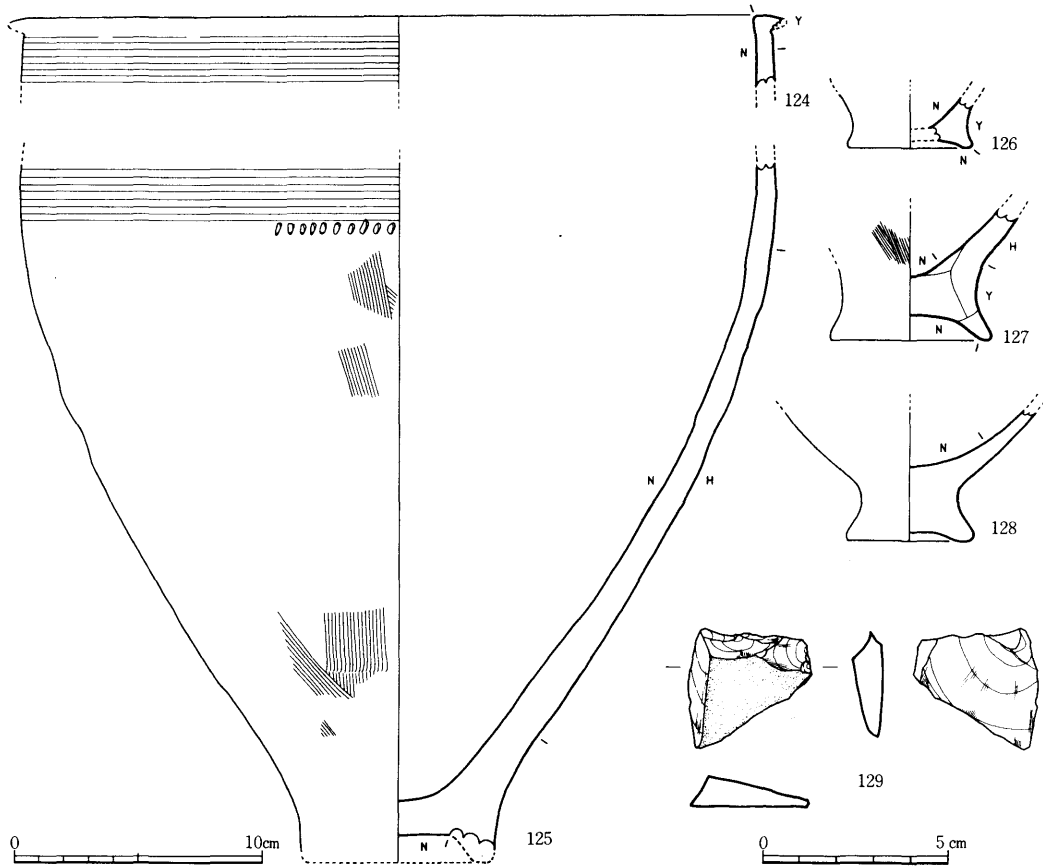


Fig. 44 土器溜り出土遺物実測図 (2)

120～123は「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。124と125は同一個体である。口縁部は端部外面に断面三角形の粘土帯を貼付し、逆「L」字形に短く開くものと思われる。口縁部直下の外面には櫛描の直線文、その下位にヘラによる刺突文を施文する。126・127は側面が裾広がりになる底部で、窪み底（126）と上げ底（127）のものがある。

128は台付鉢の底部であろう。底径は小さい。

129は寸づまりな横長剥片。裏面が主要剥離面で、正面上端部の剥離面を打面として剥片剥離作業が行なわれる。正面の大半に自然面を残す。

(7) 性格不明の遺物 (Fig. 45・46-133, PL. 13(4)・20)

調査区北東部の遺構面から出土した弥生時代前期末の甕である。ほぼ一個体分が出土したが、それに伴う遺構の掘り方が見あたらず、性格はわからない。甕の出土範囲は東西約

65cm、南北約80cmで、検出面から18cmまでの深さに集中する。

口径40.3cm、器高43.3cmの大形の甕で、器高に比べて口径が大きい。胴部最大径は口径をやや上回り、底部から約 $\frac{2}{3}$ ほど上位にある。口縁部は如意形に短く外反し、口唇部の下端にヘラによる浅い刻目を施す。口縁部直下の頸部外面には断面三角形の貼付突帯を1条貼付する。突帯頂部には刻目はない。内外面ともミガキは行われず、縦・斜刷毛目仕上げ。

(8) 遺構に伴わない遺物

(Fig. 46-130~132, PL. 19)

130~132は遺構面に貼りついた状態で出土した粗製の縄文土器。130は甕で、口縁端部は先細りとなり平坦。内外面とも横、斜め方向の条痕で、内面はその後ナデている。131は深鉢。口縁部は外弯しながら立ち上がり、口縁端部は尖りぎみに終わる。内面の調整は風化が著しく観察しにくい。外面は横方向の粗い条痕で、口縁端部内面はその後ナデている。132は甕ないしは深鉢。内外面とも横方向の条痕で、内面はその後ナデる。「遺跡保存地区」の北東約150mに位置する教養部複合棟敷地では、弥生時代以降の遺構面を構成するオリープ灰色粘質土(Hue10Y5/2)が縄文時代晩期の遺物包含層であり、⁴⁾「遺跡保存地区」の遺構面と同一の色調、組成であることから、縄文時代晩期中頃~後半に属するものと考えられる。

3 小結

第3・4次調査で検出した遺構は、上述したように竪穴住居跡4棟、土壇18基、溝6条、河川跡のほか柱穴多数である。

竪穴住居跡は弥生時代中期前半(第20号竪穴住居跡)、中期後半(第21号竪穴住居跡)、弥生時代中期と考えられるもの(第14号竪穴住居跡)および古墳時代初頭(第19号竪穴住居跡)各1棟の計4棟を検出した。

このうち、平面形態円形の第20号竪穴住居跡は、住居の南縁に沿って出入口と考えられる住居外への張り出しが認められた。遺跡保存地区では第2・9号竪穴住居跡に次いで3例

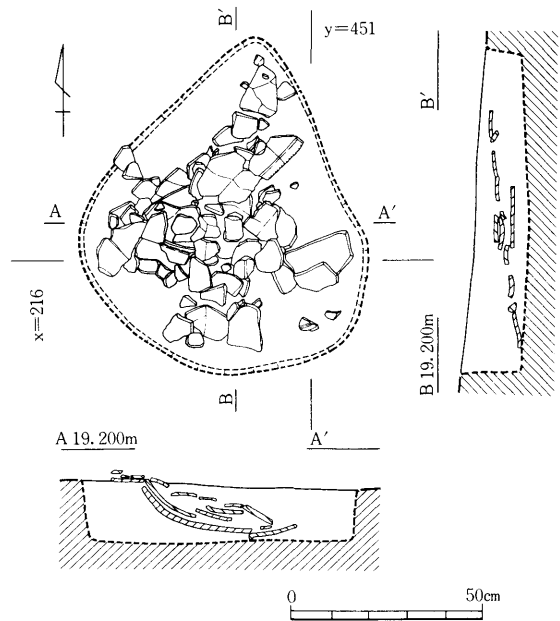


Fig. 45 性格不明の遺物出土状況実測図

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）



Fig. 46 性格不明および遺構に伴わない遺物実測図

目の検出例である。

また、第21号竪穴住居跡は平面形態が隅丸長方形で、弥生時代の竪穴住居跡の平面形態が方形から円形へと移行する、前期後半～末頃を第一の画期とするならば、円形から方形へ再び変化する第二の画期に相当する住居である。宇部市北迫遺跡⁵⁾、防府市大崎遺跡⁶⁾、熊毛郡熊毛町岡山遺跡⁷⁾で類例がみられるように、床面積は大半が約20㎡弱の小形である。この時期から大形化する一部の円形住居を除いて他の円形の住居と同規模かやや小さく、平面形態による規模の差はみられない。各住居とも壁溝をもたない点も共通する。

また、この住居には、内径約16m、外径約18m、上面幅100～120cmの規模をもち、周囲を弧状に巡る断面「U」字形の溝が付属施設として設けられている。住居と溝の内縁との距離は、西辺からは約7.6m、北辺からは約5.9m、東辺からは約4.6mである。住居は円形に区画された空間の中央部からやや東寄りに位置するが、「弥生時代の集落では、併存住居間に最低約20m程度の距離が保たれ⁸⁾」ていると想定されていることから、区画内に他の住居の同時併存は考えにくい。また、住居と溝との空間地には住居に伴うと考えられる2基の土壙が並列して存在することから、この溝で区画された約250㎡のエリアが遺跡保存地区の集落内における弥生時代中期後半の1軒の住居の占有面積と考えられる。県内では豊浦郡菊川町下七見遺跡⁹⁾、下関市秋根遺跡¹⁰⁾などで後期終末の住居の周囲を巡る溝の報告例があるが、いずれも住居と溝の内縁との距離は約1～2mで、住居外に設けられた雨水処理のための雨落排水溝と考えるのが妥当で、本例とは性格の異なるものである。

なお、南半部は遺跡保存地区外にあたるため完掘しておらず、開口部の存否は不明である。

土壙は18基検出した。帰属時期の明らかでない9基を除いた内訳は、弥生時代中期中頃1基、中頃～後半1基、後半2基、後期前半1基のほか、中期3基、後期1基である。このうち、第67・69号土壙は第21号竪穴住居跡に付設した土壙と考えられる。平面形態は不整形な楕円形に近いものが多く、円形、隅丸長方形のものもわずかに存在する。規模は、長軸66cm、短軸38cmの第53号土壙から長軸298cm、短軸116cmの第57号土壙までバラエティーに富み、規模の大小による时期的な差異はみられない。長軸の短軸に対する割合も1.4～3.8までさまざまである。後世の削平によって残存状態は良くないが、断面形は逆台形をなす皿状のことが多い。長軸方向は北東－南西のものが半数を占め、中期の土壙は北－南の長軸方向をもつものはない。

溝は、北－南および北西－南東に直線的に走行するものが多い。後世の削平、攪乱によっ

て残存状態は悪く、完結するものはない。また、出土遺物も少なく、時期がわかるのは弥生時代中期後半の第6・9号溝だけある。このうち、第9号溝は上面幅30～60cmで、断面形は「V」字形に近く、溝底は狭い。検出面からの深さは約15cmを残すにすぎない。

河川跡は調査区東端部で検出した。北部で幅約1～3m、南部で幅約4～5mの規模をもち、最大幅は約10mにもおよぶ。検出面からの深さは約70～100cmで、南東から北西へ分流して走行する。

出土遺物のうち、注目しておきたいものが若干ある。

第20号竪穴住居跡出土の一括遺物で、出土遺物には弥生土器壺・甕・高坏などがある。甕のなかには直口する口縁部をもち、口縁端部からやや下位に断面台形の貼付突帯を貼付する下城式¹¹⁾の甕が含まれている。口縁端部は平坦で、突帯の頂部にはヘラによる刻目を施す。共伴する甕には跳ね上げ口縁がすでに出現しているが、上方への突出度は小さい。

また、壺は口縁部が大きく開き、端部を上下両方あるいは下方にややつまみだし、肥厚させるものである。端部外面は狭いながらもすでに施文を意識した拡張部をもち、ヘラによる鋸歯文を施文する。周防部に通有の口縁端部が下垂する壺の古い段階のものである。また、口縁部の未発達な鋤先状口縁も含まれており、須玖I式でも古い要素をもつものである。以上の土器を中期前半の資料として着目しておきたい。

河川跡から出土した靴¹³⁾の羽口は、奈良時代のもので、構内遺跡では二例目である。県内では下右田遺跡¹⁴⁾、円光寺遺跡¹⁵⁾などの集落遺跡からの出土例があるが、いずれも中世のもので、本例によって県内ではかなり早い段階から当地で精錬が行われていたことが明らかとなった。

4 あとがき

以上、昭和57年度以降、四次にわたる遺跡保存地区の調査の成果を報告した。昭和42年以降の統合移転に伴う施設整備のさなかであって、当地区に埋存する遺構が現地保存されたことは、遺跡保存地区が構内遺跡でも弥生時代以降の住居形式・構造および集落形態・規模の時期的な変遷過程が学習できる、学術、研究上極めて良好な遺構分布地域であることが強く認識された結果であった。しかし、調査後は再び埋め戻され、活用、公開はほとんどなされていないのが現状である。将来的には、遺跡公園として調査データを反映した竪穴住居跡、河川跡、溝などの立体的な復原を行い、大学独自の積極的な利用形態を図ることが課題となるであろう。全学の御支援をお願いしたい。

なお、遺跡保存地区の総括は次年報に譲ることとし、最後に、きびしい予算のなか調査

の実施にあたって御理解、御助力を惜しまれなかった関係各位に心より深謝する所存である。

[注]

- 1) 河村吉行「山口大学構内遺跡遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年)。

なお、今回報告した遺物の整理過程で、第1次調査時に検出した第3号土壙の出土遺物が1点未報告のままであることが判明した。134(Fig47,PL.20)がそれで、頸部外面に断面三角形の扁平な2条の貼付突帯を貼付する壺である。突帯の下位にはヘラによる線刻がなされているが、下半部は欠損している。アーチ状の凹弧を向かって左から右へ互いの端部が交差するように描き、各端部から下方に直線的に沈線を線刻する。できあがった少なくとも横三列に重複する幅約5cmの楕円形状の区画の中には、左側、中央部では4本、右側では少なくとも2本の沈線が縦に線刻されている。中央部と左側は各2本の沈線が上部で交差し、山形になるが、左側では左半部の2本の沈線は交差していない。

突帯より上位は横ナデ、他はナデ仕上げ。成形は粗雑であるが、胎土、焼成は精良。内外面とも浅黄橙色(Hue 7.5YR8/3)を呈する。

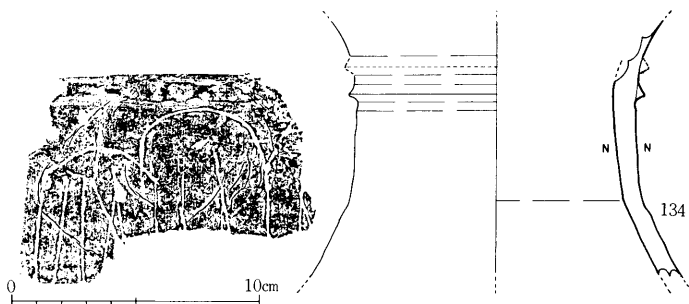


Fig. 47 第3号土壙出土遺物実測図

- 2) 河村吉行「山口大学構内遺跡遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1987年)。
- 3) 注1)に同じ。
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年)。
- 5) 小野忠熙「北迫遺跡」(『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年)。
- 6) 三戸田晃司・山本源太郎「大崎遺跡」(『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』、山口県教育委員会、1985年)。
- 7) 小野忠熙「岡山遺跡」(『島田川』、山口大学島田川遺跡学術調査団、山口大学、1953年)。
- 8) 藤田憲司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—」(『考古学研究』、第31巻第2号、考古学研究会、1984年)。
- 9) 村岡和雄・磯部貴文『下七見遺跡Ⅰ』(菊川町教育委員会、1989年)。
- 10) 下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
- 11) 後藤宗俊『台ノ原遺跡』(大分県教育委員会、1975年)。
- 12) 坂本嘉弘「宮ノ原遺跡出土の土器」(『宮ノ原遺跡』、安心院町教育委員会、1984年)。
- 13) 河村吉行・福島朝子「吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1985年)。
- 14) 山口県教育委員会『下右田遺跡第4次調査概報・総括』(1980年)。
- 15) 山口県教育委員会『円光寺遺跡』(1987年)。

吉田溝内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）

Tab. 4 出土遺物観察表

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
第19号竪穴住居跡 (Fig. 25)						
1	弥生土器 壺	②(5.0)	①にぶい黄橙色(10YR5/3) ②褐灰色(5YR4/1)	やや不良	良好	
2	弥生土器 甕	②(6.2)	①②にぶい橙色(7.5YR7/3) 外底面 黒色(7.5YR1.7/1)	やや不良	良好	
3	土師器 甕	①(23.5)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	複合口縁
4	土師器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰褐色(7.5YR5/1)	不良	良好	
5	土師器 甕		①浅黄橙色(7.5YR8/2) ②灰白色(7.5YR8/4)	不良	やや不良	複合口縁
第20号竪穴住居跡 (Fig. 27)						
6	弥生土器 壺		①浅黄橙色(7.5YR8/2) ②灰白色(7.5YR8/4)	やや不良	良好	内面に黒斑
7	弥生土器 壺		①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰白色(7.5YR8/1)	不良	良好	
8	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/4)	不良	不良	鋤先状口縁
9	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR6/2)	良好	やや不良	
10	弥生土器 壺		橙色(5YR7/8)	不良	良好	
11	弥生土器 壺		にぶい橙色(7.5YR7/3)	良好	良好	
12	弥生土器 甕	①(29.0)	にぶい橙色(5YR6/4)	不良	良好	
13	弥生土器 甕		橙色(5YR7/8)	不良	良好	跳ね上げ口縁
14	弥生土器 甕		①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	跳ね上げ口縁
15	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	精良	良好	跳ね上げ口縁 外面に煤付着
16	弥生土器 甕		にぶい褐色(7.5YR5/4)	不良	やや不良	跳ね上げ口縁
17	弥生土器 甕		灰白色(2.5Y8/2)	良好	良好	
18	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/3)	良好	精良	下城式
19	弥生土器 甕	②(6.4)	①にぶい赤褐色(2.5YR4/3) ②浅黄橙色(10YR8/3)	良好	良好	外底面黒色 (7.5YR7/1)
20	弥生土器 甕	②(7.9)	①にぶい褐色(2.5Y8/4) ②淡黄色(7.5YR6/3)	不良	良好	
21	弥生土器 甕	②(4.4)	①褐色(2.5YR7/6) ②灰黄褐色(10YR7/6)	良好	良好	
22	弥生土器 高坏		灰白色(7.5YR8/2)	不良	やや不良	
23	弥生土器 高坏		にぶい橙色(7.5YR6/3)	精良	やや不良	
24	弥生土器 高坏		淡橙色(5YR8/4)	精良	不良	
25	弥生土器 甕	②(7.9)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②暗灰色(N3/0)	良好	良好	甕を転用 焼成後穿孔
第21号竪穴住居跡 (Fig. 29)						
27	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	不良	不良	
28	弥生土器 壺		灰白色(10YR8/2)	やや不良	良好	内外面に黒斑
29	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	精良	良好	跳ね上げ口縁
30	弥生土器 甕	②(5.4)	①にぶい褐色(7.5YR7/1) ②暗褐色(5YR7/3)	不良	良好	
第53号土壙 (Fig. 31)						
31	土師器 甕	①(10.8)	橙色(5YR7/6)	不良	やや不良	
第54号土壙 (Fig. 31)						
32	弥生土器 甕		褐色(7.5YR5/1)	良好	良好	
33	弥生土器 甕		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	良好	

出土遺物観察表

法量 () は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考		
第56号土壙 (Fig. 31)								
35	弥生土器 壺		①にぶい橙色(5YR7/3) ②浅黄橙色(2.5YR7/3)	良	好	良	好	
36	弥生土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰色(N4/0)	不	良	良	好	跳ね上げ口縁
37	弥生土器 甕		①にぶい橙色(5YR4/1) ②灰色(5YR4/1)	良	好	良	好	跳ね上げ口縁
第57号土壙 (Fig. 31)								
38	弥生土器 甕	①(33.0)	灰白色(2.5Y8/2)	良	好	やや不良		
第58号土壙 (Fig. 31)								
39	弥生土器 甕	①(24.6)	①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②灰白色(7.5YR8/2)	良	好	やや不良		跳ね上げ口縁
40	弥生土器 甕	②(6.4)	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②褐灰色(10YR4/1)	良	好	やや不良		
第59号土壙 (Fig. 31)								
41	弥生土器 甕	①(20.8)	①灰褐色(5YR5/2) ②灰白色(7.5YR8/1)	良	好	良	好	
42	弥生土器 甕	①(19.8)	灰白色(2.5Y8/2)	不	良	良	好	跳ね上げ口縁
43	弥生土器 甕	②8.4	①淡橙色(5YR8/3) ②明褐灰色(7.5YR7/1)	不	良	良	好	
44	弥生土器 高坏		赤橙色(10R6/4)	良	好	良	好	
第69号土壙 (Fig. 34)								
45	弥生土器 壺	①(17.4)	浅黄橙色(7.5YR8/4)	良	好	やや不良		
46	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/4)	良	好	不	良	
47	弥生土器 甕	①(18.4)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)	良	好	良	好	跳ね上げ口縁
48	弥生土器 甕		淡橙色(5YR8/3)	良	好	良	好	跳ね上げ口縁
49	弥生土器 甕		①灰赤色(2.5YR6/2) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	やや不良	良	良	好	跳ね上げ口縁
50	弥生土器 甕		黒褐色(10YR3/1)	良	好	良	好	下城式
51	弥生土器 甕	② 5.9	褐灰色(5YR6/1)	良	好	良	好	
52	弥生土器 甕	②(5.7)	①灰褐色(7.5YR6/2) ②灰色(N4/0)	良	好	良	好	
53	弥生土器 高坏		灰白色(10YR7/1)	良	好	良	好	外面の大部分に黒斑
第66号土壙 (Fig. 34)								
54	弥生土器 甕	② 7.6	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②褐灰色(10YR5/1)	良	好	良	好	
第6号溝 (Fig. 37・38)								
55	弥生土器 壺	①(21.0)	浅黄橙色(10YR8/3)	良	好	不	良	鋤先状口縁 円形浮文
56	弥生土器 壺		淡赤橙色(2.5YR7/4)	不	良	良	好	鋤先状口縁
57	弥生土器 壺		橙色(2.5YR6/6)	不	良	不	良	
58	弥生土器 壺		①淡橙色(5YR8/4) ②にぶい橙色(5YR7/3)	不	良	やや不良		
59	弥生土器 壺	①(22.2)	①褐灰色(7.5YR5/1) ②淡橙色(5YR8/4)	良	好	良	好	
60	弥生土器 壺		①淡黄色(2.5Y8/4) ②灰白色(7.5YR8/1)	良	好	良	好	
61	弥生土器 壺	①(18.0)	淡黄色(2.5Y8/3)	精	良	精	良	
62	弥生土器 壺	①(12.4)	①淡橙色(5YR8/4) ②灰白色(10YR8/2)	不	良	不	良	
63	弥生土器 壺		淡橙色(5YR8/4)	やや不良	良	良	好	
64	弥生土器 壺	②(7.1)	①淡赤橙色(2.5YR7/4) ②灰白色(2.5Y8/2)	良	好	良	好	
65	弥生土器 壺	②(5.8)	①淡橙色(5YR8/4) ②橙色(5YR8/4)	不	良	やや不良		
66	弥生土器 壺	②(10.6)	明褐灰色(7.5YR7/2)	不	良	良	好	

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）

法量（ ）は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
67	弥生土器 壺	② 6.4	①淡黄褐色(10YR4/3) ②褐灰色(10YR5/1)	不良	良好	
68	弥生土器 甕	①(25.0)	にぶい黄褐色(10YR7/3)	良好	良好	跳ね上げ口縁
69	弥生土器 甕		灰白色(7.5YR8/1)	良好	不良	跳ね上げ口縁
70	弥生土器 甕		にぶい橙色(7.5YR7/4)	良好	良好	跳ね上げ口縁
71	弥生土器 甕	①(25.2)	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②明赤褐色(5YR5/6)	良好	良好	跳ね上げ口縁
72	弥生土器 甕	①(17.6)	①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰白色(2.5YR8/1)	不良	良好	
73	弥生土器 甕		①橙色(5YR7/8) ②赤灰色(2.5YR6/1)	不良	やや不良	
74	弥生土器 甕		①淡橙色(5YR8/3) ②橙色(2.5YR7/6)	不良	やや不良	
75	弥生土器 甕		浅黄褐色(10YR8/3)	良好	良好	
76	弥生土器 甕	①(13.2)	褐灰色(7.5YR5/1)	良好	良好	
77	弥生土器 甕	②(7.5)	橙色(2.5YR6/8)	良好	不良	
78	弥生土器 甕	② 5.6	①赤灰色(2.5YR6/1) ②赤褐色(10Y6/8)	不良	良好	
79	弥生土器 壺	② 7.0	①淡橙色(5YR8/3) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	
80	弥生土器 甕	② 4.4	①橙色(2.5YR6/6) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	良好	良好	
81	弥生土器 鉢	①(14.0)	①明褐灰色(5YR7/2) ②灰白色(7.5YR8/2)	やや不良	やや不良	
82	弥生土器 高坏		①灰白色(10YR8/1) ②暗灰色(N3/0)	不良	良好	
83	弥生土器 高坏		①淡橙色(5YR8/3) ②赤褐色(10R6/6)	不良	良好	
84	弥生土器 高坏	②(18.9)	にぶい橙色(5YR7/3)	精良	良好	
85	弥生土器 高坏	②(18.9)	①淡橙色(5YR8/3) ②赤褐色(2.5YR7/8)	やや不良	良好	
第9号溝 (Fig. 39)						
88	弥生土器 甕		明褐灰色(7.5YR7/1)	精良	良好	跳ね上げ口縁
89	弥生土器 甕		橙色(2.5Y7/8)	やや不良	不良	跳ね上げ口縁
柱穴 (Fig. 40)						
90	弥生土器 甕	②(7.8)	①橙色(2.5YR7/8) ②浅黄褐色(10YR8/3)	不良	良好	
91	弥生土器 壺		①灰白色(7.5YR8/2) ②淡赤褐色(2.5Y7/4)	不良	やや不良	
92	土師器 鉢or 碗		①浅黄褐色(10YR8/3) ②灰白色(7.5YR8/2)	不良	良好	
河川跡 (Fig. 42)						
93	弥生土器 壺		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	良好	
94	弥生土器 壺		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②褐灰色(5YR6/1)	精良	精良	
95	土師器 甕		橙色(2.5YR6/8)	不良	不良	布留式
96	土師器 甕		①にぶい橙色(5YR7/4) ②褐灰色(10YR4/1)	やや不良	やや不良	
97	土師器 甕	①(19.2)	灰黄褐色(10YR6/2)	良好	精良	
98	土師器 甕	①(19.8)	①明赤褐色(2.5Y5/6) ②灰褐色(5YR5/2)	良好	良好	
99	須恵器 坏蓋		灰白色(N8/0)	やや不良	やや不良	
100	須恵器 坏蓋	①(17.0)	灰色(N6/0)	良好	良好	
101	須恵器 坏蓋	①(22.2)	①灰色(7.5Y4/1) ②淡黄色(2.5Y8/3)	良好	不良	
102	須恵器 坏身	①12.4 ②7.0 ③5.0	灰白色(N7/0)	不良	やや不良	
103	須恵器 坏身		青灰色(10BG6/1)	良好	堅緻	
104	須恵器 坏身	②(7.0)	明青灰色(10BG7/1)	良好	良好	

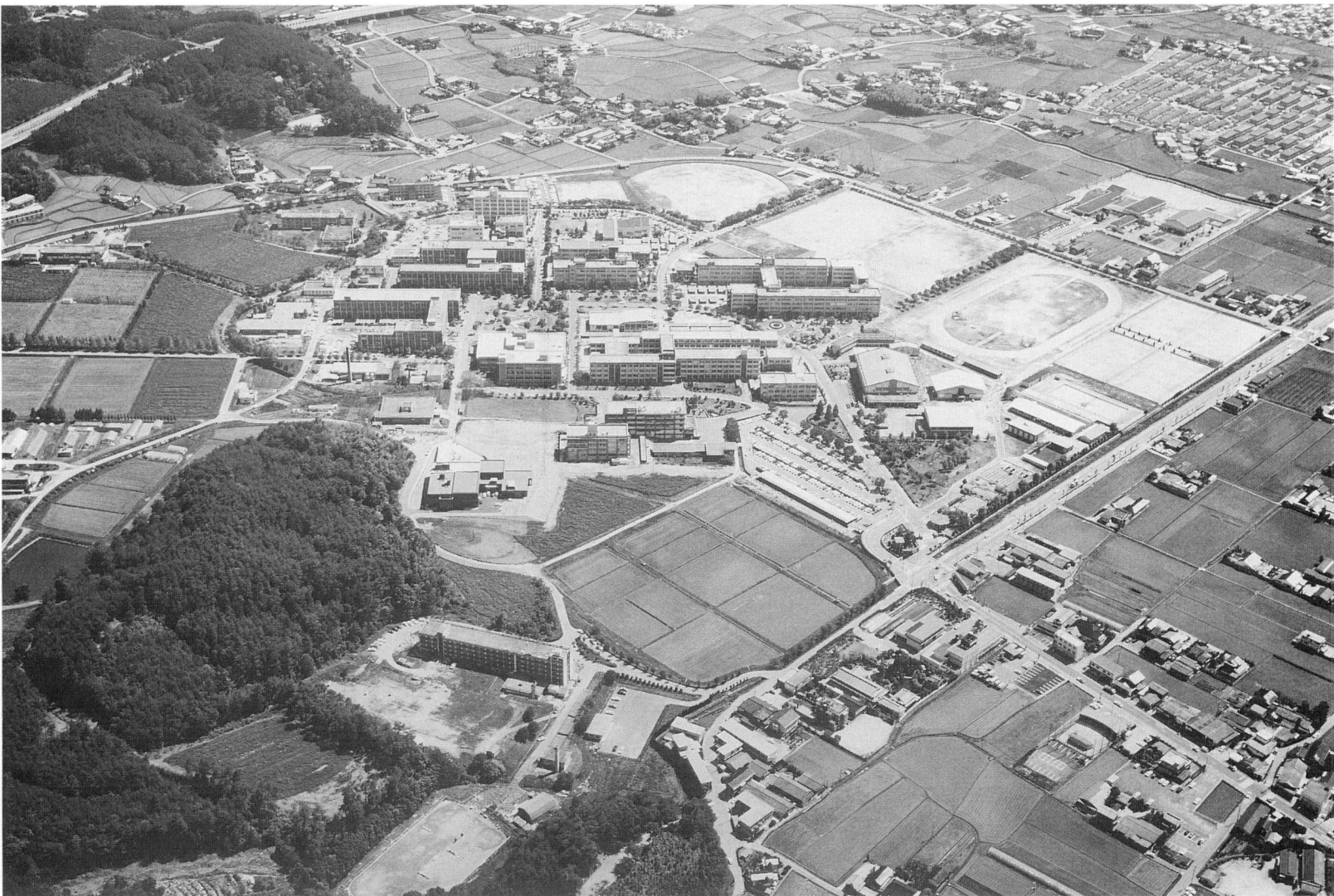
出土遺物観察表

法量 () は復原値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面 ②内面)	胎土	焼成	備考
105	須恵器 坏身	②(7.6)	灰白色(N7/0)	良好	良好	
106	須恵器 坏身	②(8.4)	①灰白色(N7/0) ②明青灰色(5B7/1)	やや不良	良好	
107	須恵器 坏身	②(8.4)	①青灰色(10GB6/1) ②明青灰色(10BG7/1)	不良	良好	
108	須恵器 坏身	②(9.4)	灰白色(N7/0)	精良	良好	
109	弥生土器 壺or鉢	②(8.2)	灰白色(2.5Y8/2)	良好	やや不良	
110	弥生土器 甕	② 7.0	にぶい橙色(2.5YR6/3)	良好	精良	
111	須恵器 坏身	①(11.8)	①暗青灰色(10BG4/1) ②青灰色(10BG6/1)	精良	堅緻	
土器溜り (Fig. 43・44)						
113	弥生土器 壺	①20.8	淡赤橙色(2.5YR7/4)	良好	良好	
114	弥生土器 壺		淡黄色(2.5Y8/4)	良好	不良	
115	弥生土器 壺		浅黄橙色(10YR8/3)	やや不良	やや不良	鋤先状口縁
116	弥生土器 壺		浅黄橙色(7.5YR8/3)	良好	不良	
117	弥生土器 壺		にぶい橙色(5YR7/4)	精良	精良	
118	弥生土器 甕	①(25.8)	にぶい橙色(5YR7/4)	良好	良好	
119	弥生土器 甕	①(24.0)	にぶい橙色(5YR7/4)	良好	良好	外面に煤付着
120	弥生土器 甕	①(18.4)	①橙色(5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや不良	やや不良	
121	弥生土器 甕	①(23.2)	灰褐色(5YR6/1)	不良	良好	
122	弥生土器 甕		灰白色(7.5YR8/2)	不良	やや不良	
123	弥生土器 甕		にぶい黄橙色(10YR7/2)	良好	やや不良	
124	弥生土器 甕	①(28.8)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	125と同一個体
125	弥生土器 甕	②(7.5)	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい橙色(5YR7/4)	不良	良好	124と同一個体
126	弥生土器 甕	②(4.9)	①にぶい赤橙色(10R6/4) ②暗灰色(N3/0)	良好	良好	
127	弥生土器 甕	② 6.3	①灰白色(10YR8/2) ②明褐色(7.5YR7/2)	やや不良	良好	
128	弥生土器 台付鉢	② 5.0	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②黒褐色(10YR3/1)	やや不良	不良	
性格不明および遺構に伴わない遺物 (Fig. 46)						
130	縄文土器 甕		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	精良	良好	粗製
131	縄文土器 深鉢		①明褐色(7.5YR7/2) ②黒色(N2/0)	良好	やや不良	粗製
132	縄文土器 甕or深鉢		①灰白色(5YR8/1) ②黒色(N2/0)	不良	良好	粗製
133	弥生土器 甕	①(39.4) ②(14.4) ③42.3	淡黄色(2.5Y8/3)	不良	良好	

法量 () は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第20号竪穴住居跡 (Fig. 27)							
26	石核	7.45	4.4	3.6	111.4	姫島産黒曜石	
第54号土壙 (Fig. 31)							
34	敲石	10.0	(6.0)	4.1	372.8	デイサイト	転礫河原石
第6号溝 (Fig. 38)							
86	石鏃	2.0	0.9	0.25	0.43	安山岩	剥片鏃 平基無茎式
87	二次加工のある剥片	7.1	1.75	1.3	49.31	安山岩	
土器溜り (Fig. 44)							
129	剥片	3.1	0.8	0.8	6.5	安山岩	



吉田構内全景（北西から）



(1) 昭和60年度調査区全景(東から)

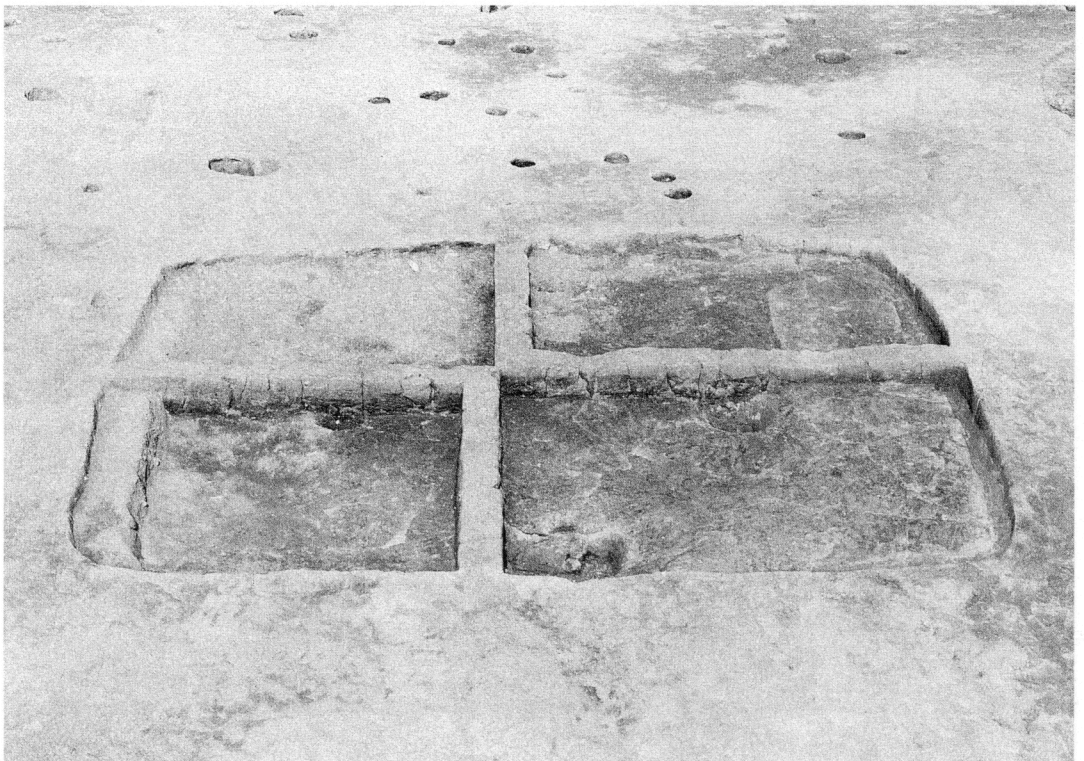


(2) 昭和61年度調査区全景(東から)

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査
(昭和60・61年度)
(2)



(1) 第14号竪穴住居跡(南東から)



(2) 第19号竪穴住居跡(南西から)



(1) 第20号竪穴住居跡(北西から)

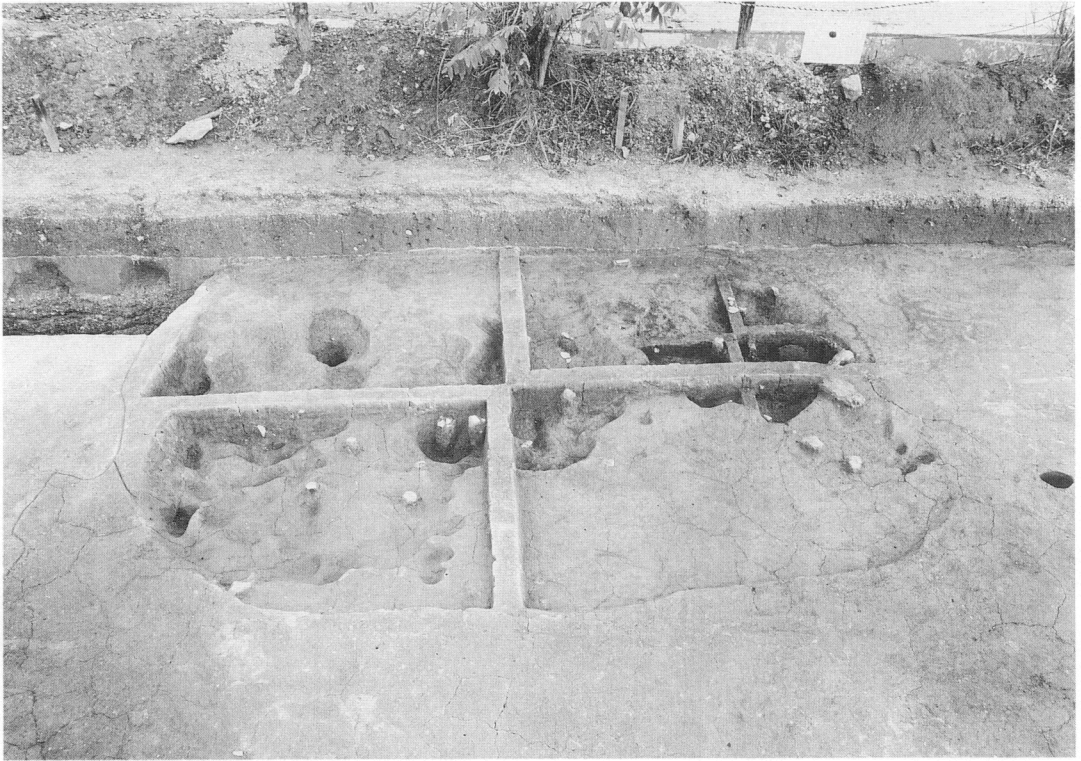


(2) 第20号竪穴住居跡出入口状施設(南から)

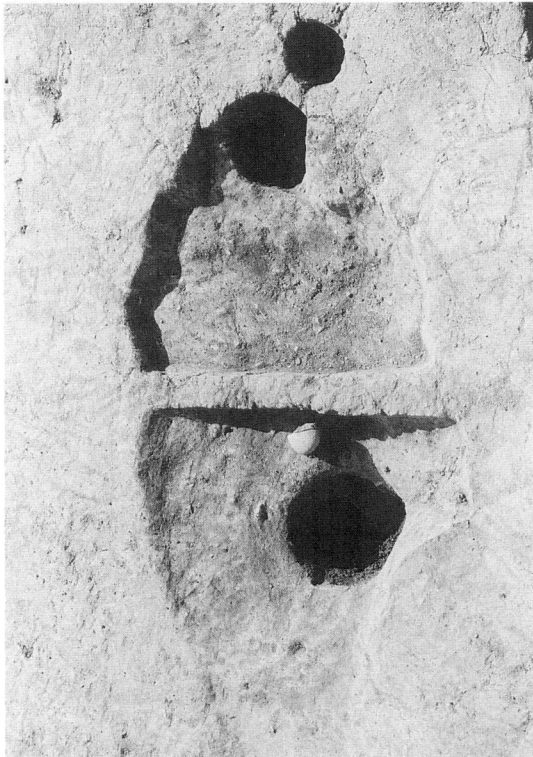


(3) 第20号竪穴住居跡出入口状施設(西から)

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査
(昭和60・61年度)
(4)



(1) 第21号竪穴住居跡(北東から)

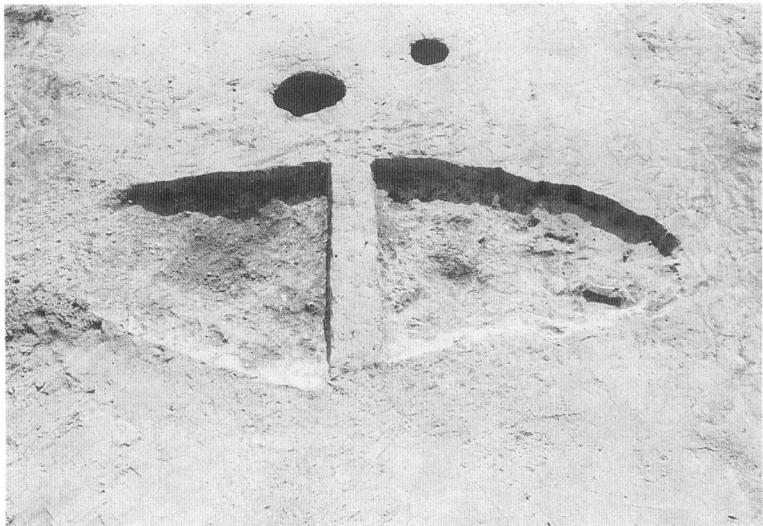


(2) 第54号土塚(北東から)



(3) 第56号土塚(北東から)

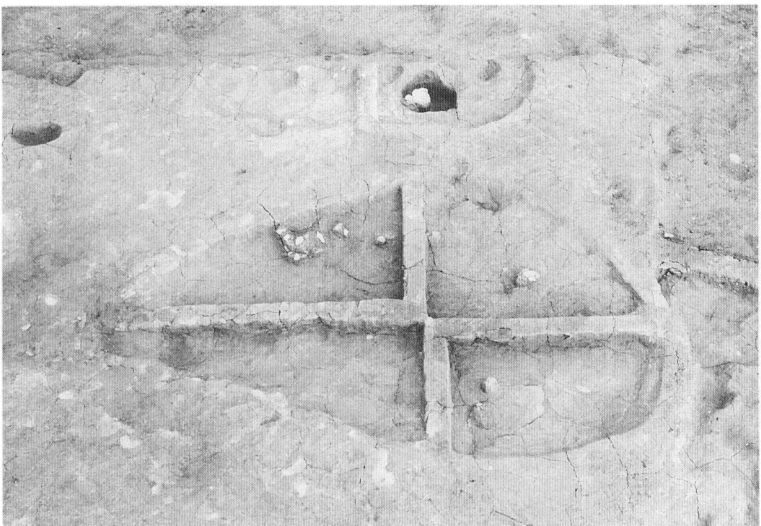
吉田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和60・61年度) (5)



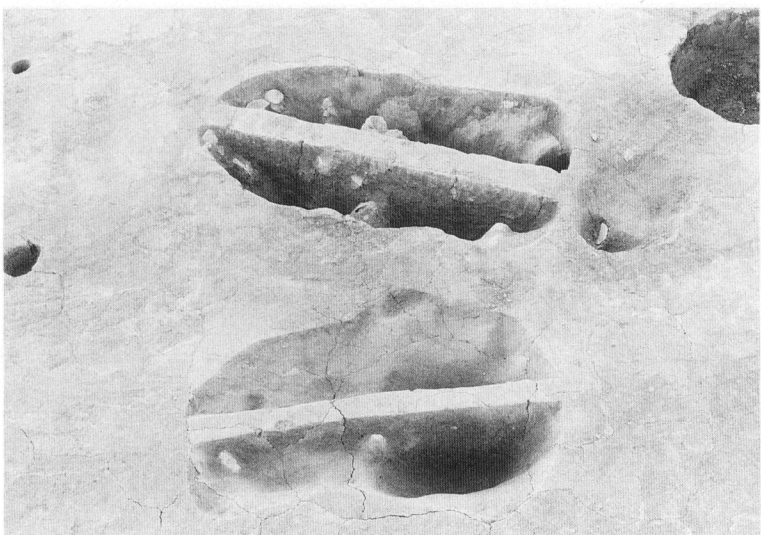
(1) 第57号土壙(北東から)



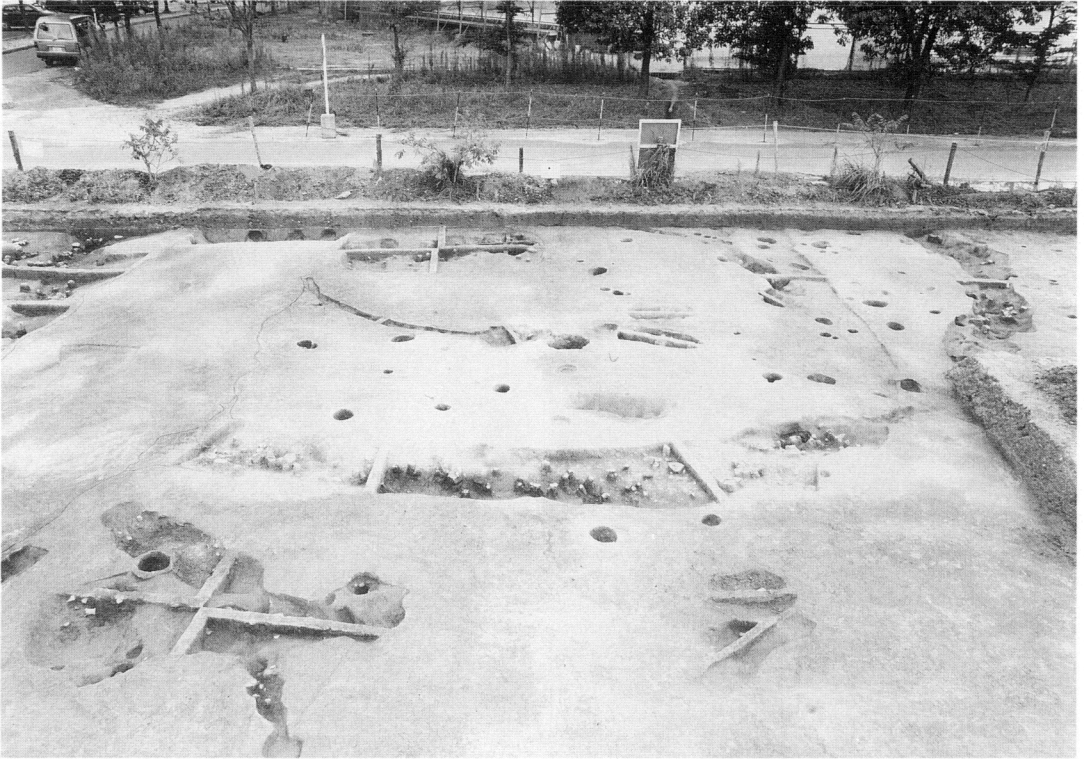
(2) 第58・59号土壙(北から)



(3) 第65・66号土壙(北東から)



(4) 第67・69号土壙(北東から)



(1) 第6号溝(北西から) (昭和60年12月20日撮影)



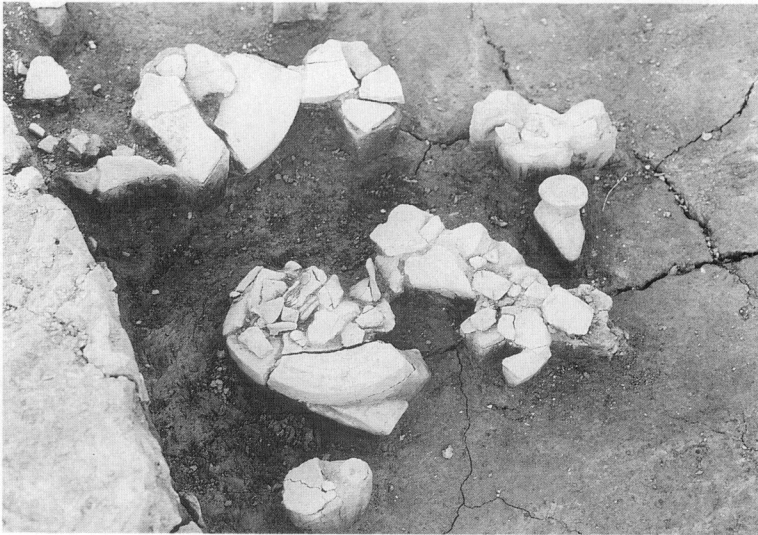
(2) 第6号溝遺物出土状況(1)(東から) (昭和60年12月20日撮影)



(3) 第6号溝遺物出土状況(2)(北東から) (昭和60年12月20日撮影)



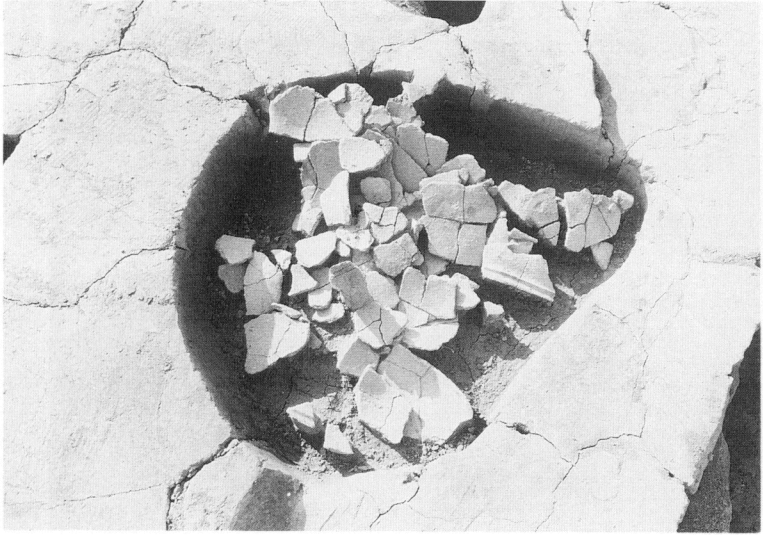
(1) 土器溜り遺物出土状況(1)(西から)



(2) 土器溜り遺物出土状況(2)(西から)

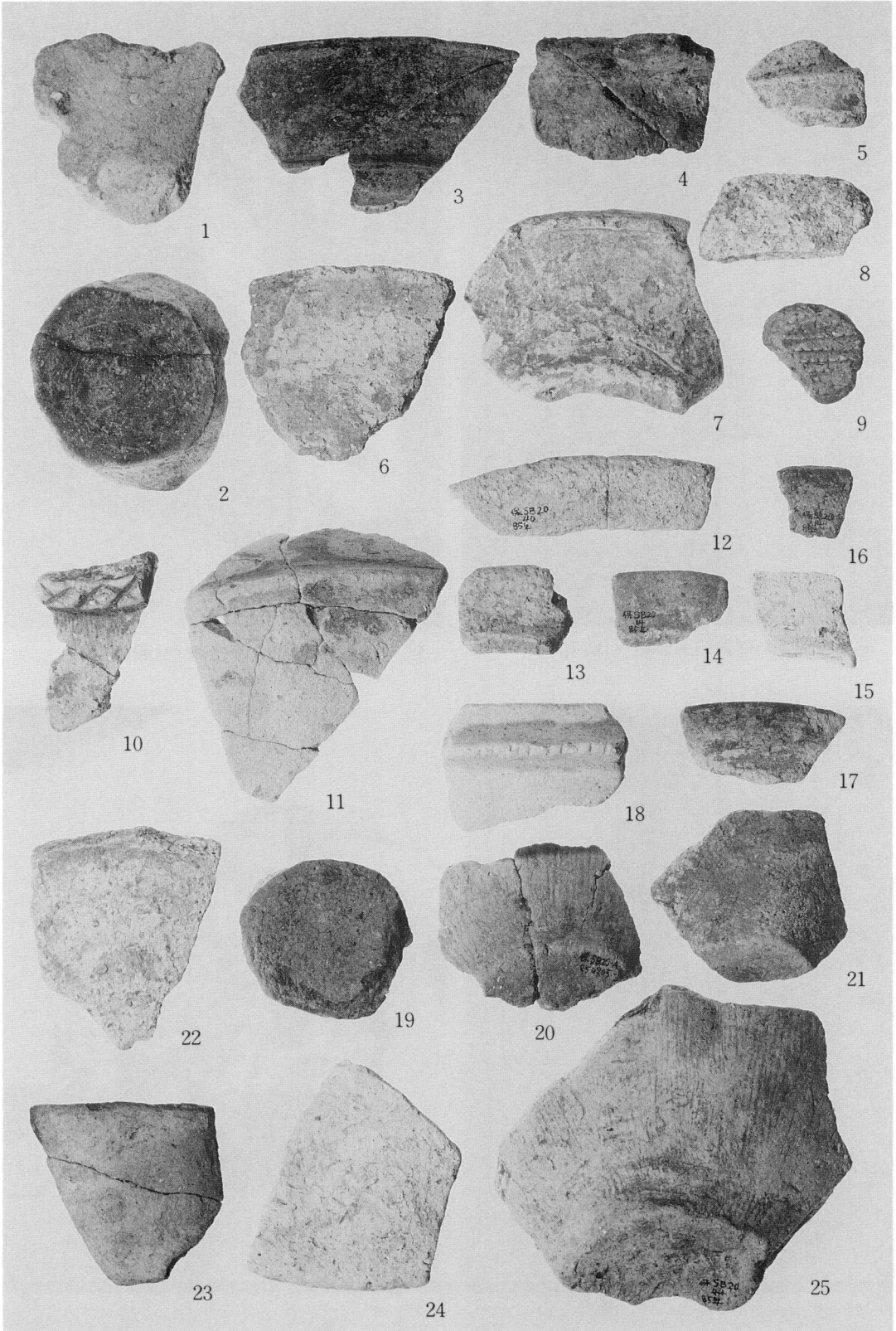


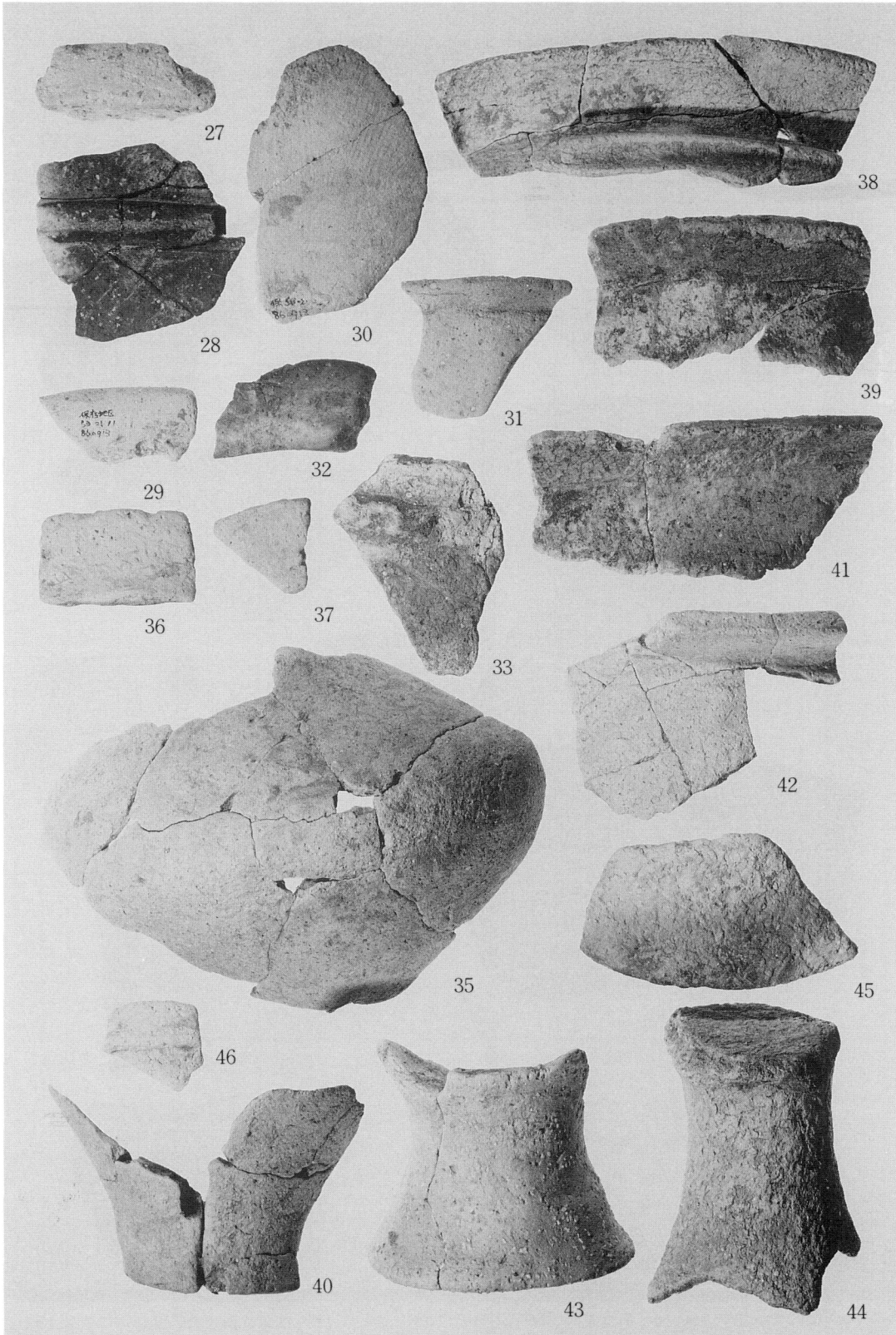
(3) 河川跡土層断面(北東から)



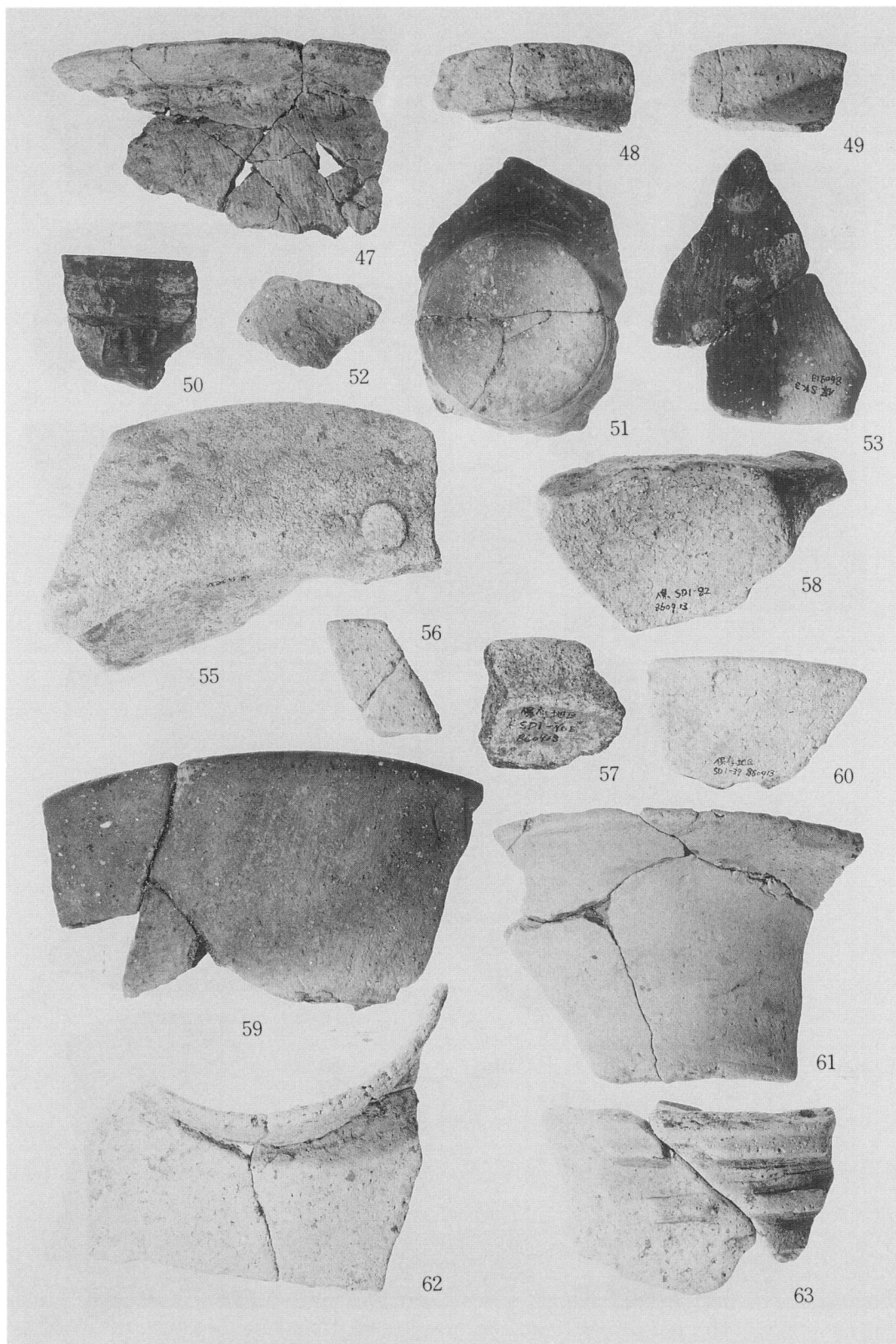
(4) 性格不明の遺物出土状況(東から)

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査
(昭和60・61年度)
(8)



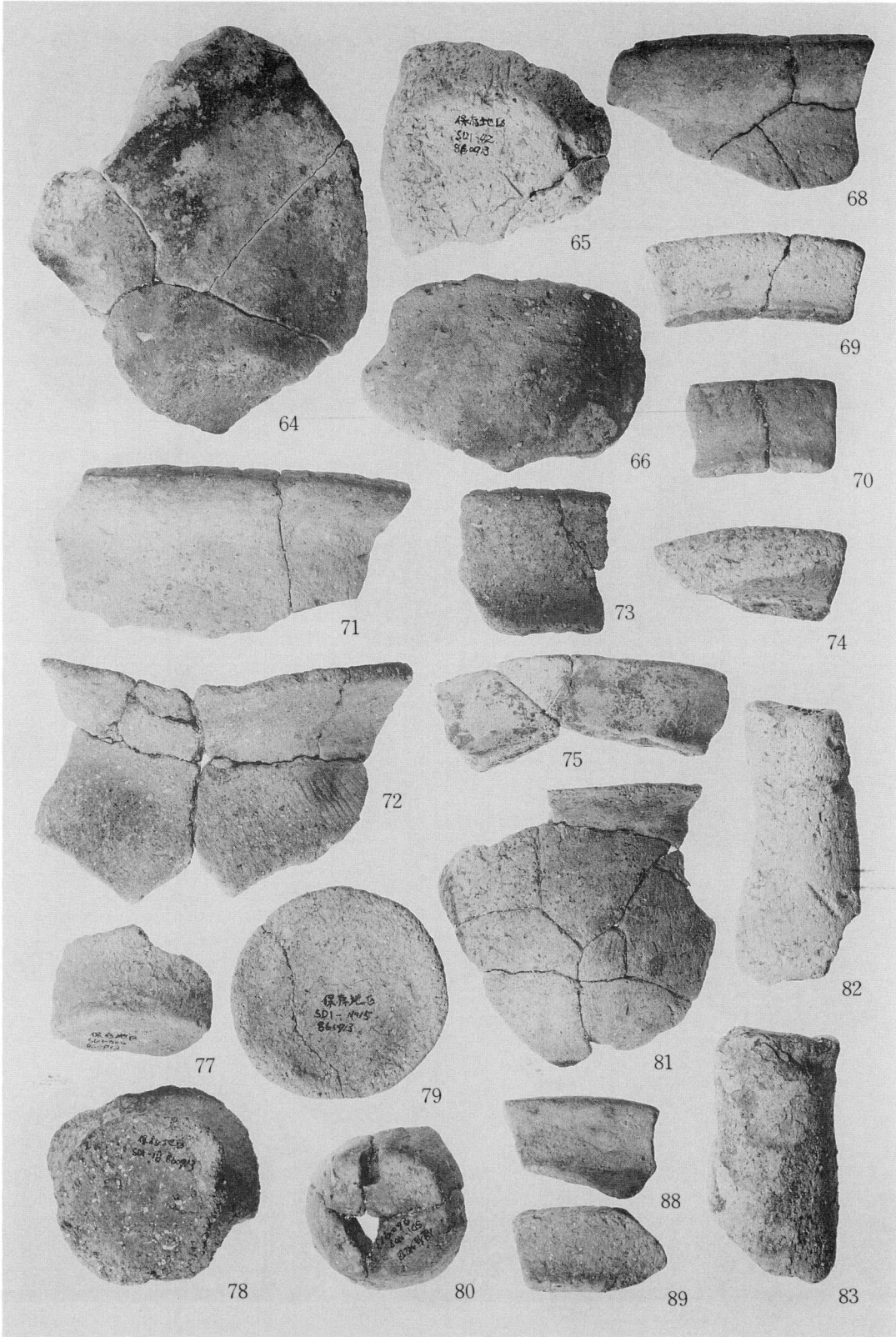


吉田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和60・61年度) (10)



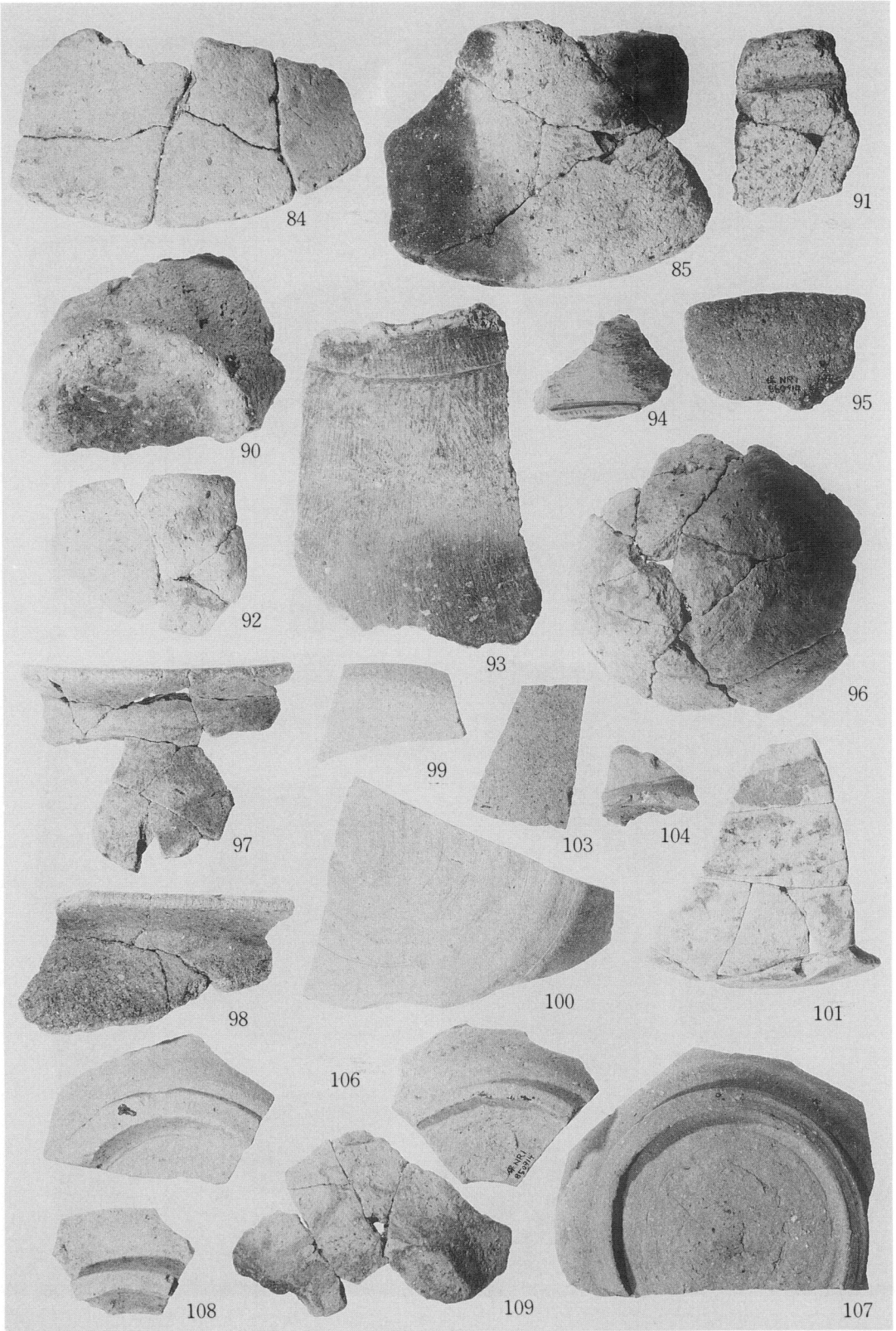
出土遺物 (3)

縮尺 約 1 : 2

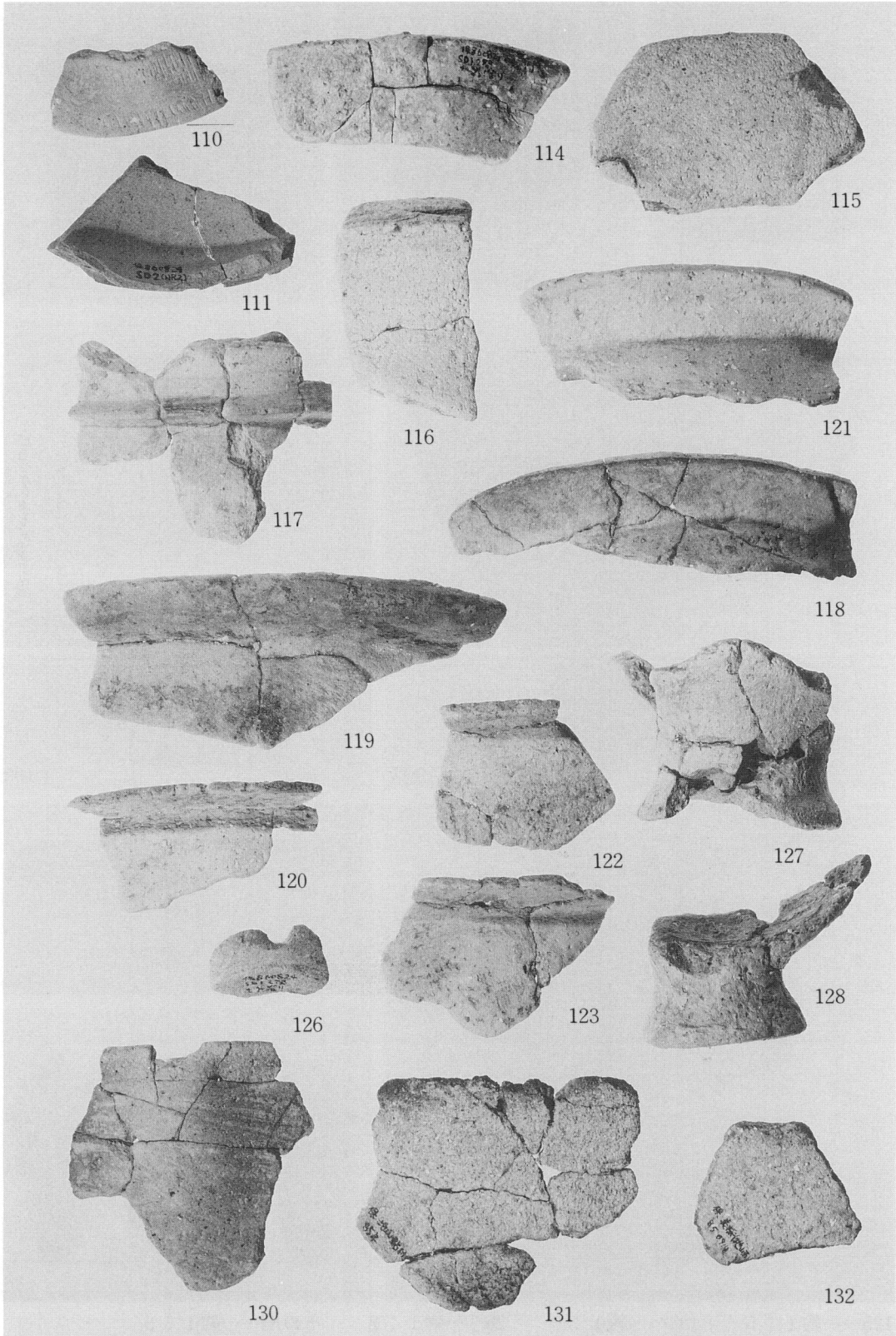


出土遺物 (4)

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査
(昭和60・61年度)
(12)



出土遺物 (5)

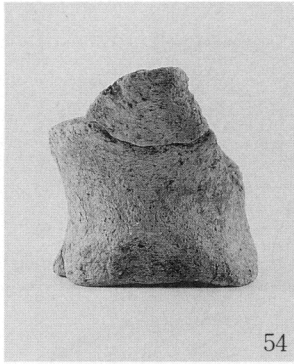


出土遺物 (6)

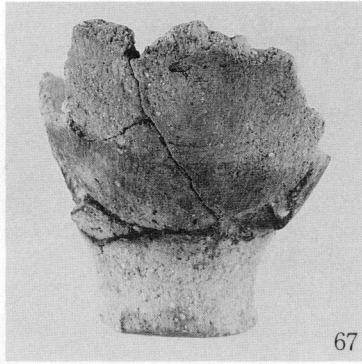
縮尺 約 1 : 2

PL. 20

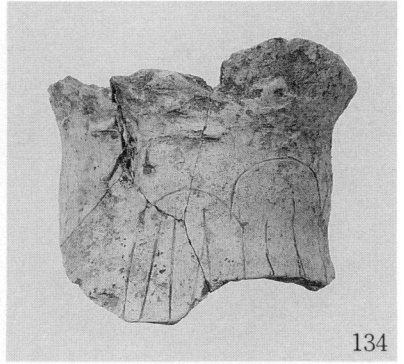
吉田構内遺跡保存地区の発掘調査
 (昭和60・61年度)
 (14)



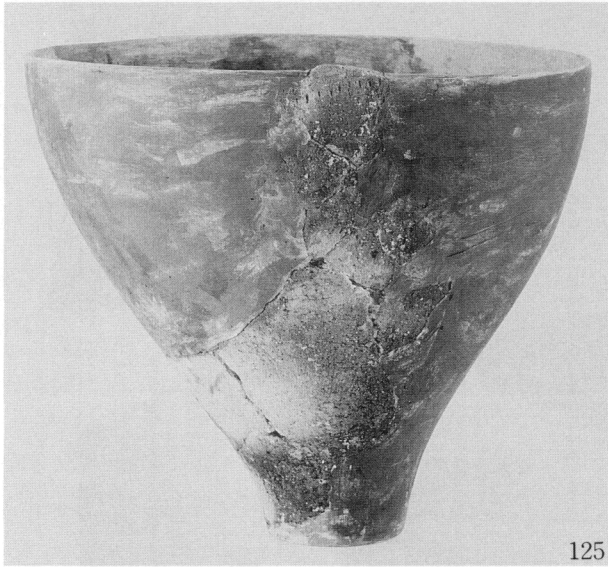
54



67



134



125



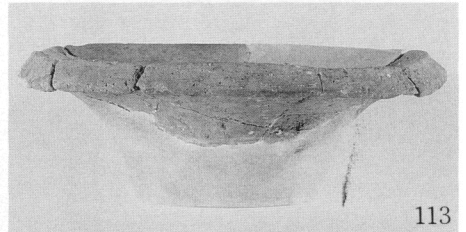
76



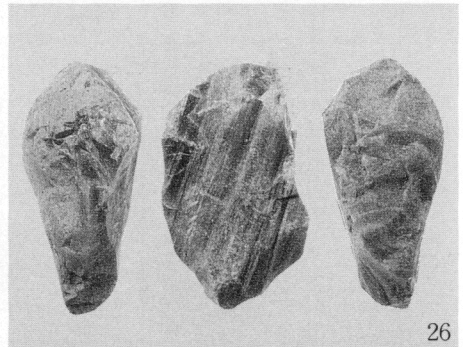
102



133



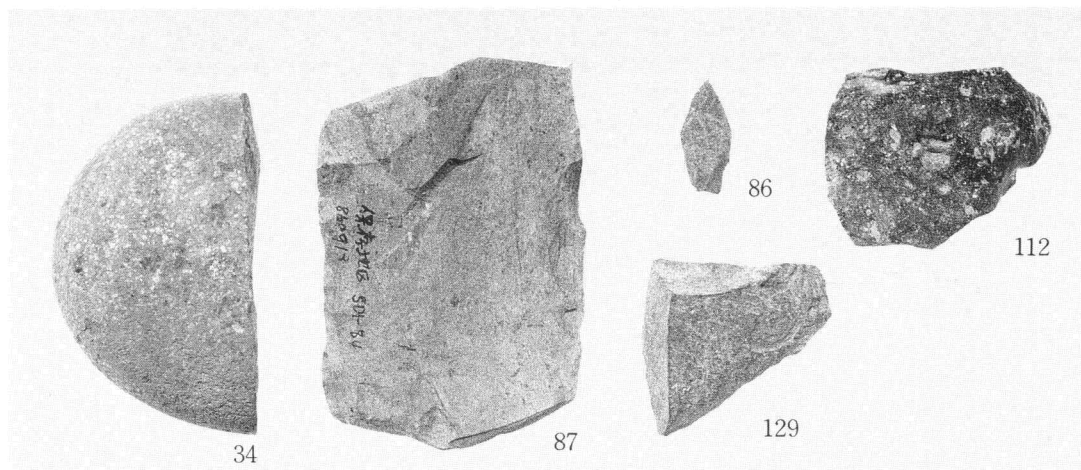
113



26

125……約1 : 5 133……約1 : 6 26……約1 : 2 その他……約1 : 3

出土遺物 (7)



出土遺物 (8)

約 1 : 2

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査 (昭和60・61年度) (15)